

第2章 ヨーロッパ中世の旅

西ローマ帝国の滅亡（476年）から14～15世紀のルネサンス期に至るおよそ1000年間のヨーロッパの時代を中世と呼ぶ。中世とはもちろん後代の歴史家がつけた呼名であり、英語の Middle Ages、フランス語の Moyen Age の訳語であって、繁栄する2つの時代に挟まれた低迷の時代を意味している。繁栄する二つの時代とは、いうまでもなくローマ・ギリシャの「古代」とルネサンス以降の「近代」である。

中世という時代 樺山紘一「異郷の発見」によれば、中世が中世と呼ばれるに至るまでには、16世紀の「ルネサンス（古代の復活）宣言」以来の新旧論争と、17世紀末から18世紀初頭にかけてフランスで行われた古代・近代論争と呼ばれる論争があった。論争では古代と近代の優劣が主題になり、古代人こそあらゆる価値の鑑であって、それを倣うことが後発の者の勤めであるとする古代派の説に対し、近代派は、あとから来た近代人のほうが有利で、近代の詩人のほうがホメロスやウェルギリウスよりも優れていると弁じた。問題の本質は「進歩の観念を承認するか否か」であった。ホメロスの古代を誰しも賞賛するが、近代はこれをも骨肉化して高みにたどりつけるとする見方、つまり「人類は時とともに進歩する」と考えるか否かが議論の焦点となっていた。

両論とも、キリスト教中世は偉大なる古代を破壊した退歩・低迷の時代であるという共通認識の上に立っての論争であり、古代と対比した現在（論争当時）は、古代の復活を果たしたあとの時代、すなわち近代であった。ルネサンス人にとって、1000年近い暗黒時代の彼方の古代を遠望するとき、両者の間には歴然たる懸崖があり、その間の溝は架橋できないほど深いとの認識があった。その認識から両者の間に横たわる「暗黒の中世」という観念が誕生した。言い換えれば、中世とは過去の栄光ある文明・文化が破壊され、同じ地域に新しい文化が再生ないし新生したことによって用いられることになった用語であって、単に古代と近代の「中間の時代」以上の意味がこめられている。近代ヨーロッパ人はこの時代を「中世」とよぶことによって否定し、古代文明から断絶した時代と認識したのであった。

ヨーロッパ中世が封建制社会であったことから、これに合わせて日本の歴史でも鎌倉時代以降を中世と呼ぶことが多いが、こちらは便宜的な時代区分であって、ヨーロッパ中世が経験した過去の否定やそれ以前の古代文明の再生という意味を伴っていない。ヨーロッパ中世に類似する「中世」として歴史家がほかに中世と呼ぶのは、「ギリシャの中世」だけである。19世紀にシュリーマンらによって、古代ギリシャのさらに古代に当たるエーゲ文明の遺跡が発掘されると、エーゲ文明と古代ギリシャを隔てる記録なき暗黒時代は「ギリシャの中世」と呼ばれ、紀元前8世紀に躍動を始める古代ギリシャの文化は「ギリシャ・ルネサンス」と呼ばれるようになった（中央公論世界の歴史「ギリシャとローマ」）。繁栄した文化・文明が壊滅的な破壊を受けたあと、前の文化を凌駕する文化が再生する歴史はほとんどない。破壊のあと古く輝かしい文化は再生することなく忘却の彼方に消え去るか、

権力者の交替による変動の歴史だけが残るか、のどちらかである。その意味で「ヨーロッパの中世」は「ルネサンス（再生）」とセットであり、ルネサンスがあったことによって中世が誕生したともいえる。後代から振返って「中世」と呼べる時代をもつことは、当該文明にとって幸運であると同時に、その空白の「中世」が新しい文化文明を懐胎し、誕生させ、育成していったことこそが重要であろう。ギリシャの中世が人類の知性を生み出す古典古代のギリシャを懐胎していたことを想起するとき、ヨーロッパの中世もまた、近代ヨーロッパの懐胎と生みの苦しみの時代であったと想定できるのである。

ギリシャ中世との対比 「古代の旅」の章で述べたとおり、B.C.2000 年頃繁栄していたクレタ・ミューケーナイ諸王国（エーゲ文明）は、アナトリアのヒッタイト王国ともども、B.C.1200 年頃突然滅亡した。ギリシャ人の第二次侵入説や海の民による攻撃説など、滅亡の原因はいろいろ推定されているがまだ結論は出ていない。エーゲ文明滅亡後、彼らの文明が使用していた線引き B 文字は二度と現れず、文字に書かれた記録が皆無のまま暗黒の 400 年余（ギリシャの中世）が経過する。

その後、BC700 年代に突然のようにポリス国家群の姿をとった新生ギリシャが登場し、ギリシャ・ルネサンスとも呼ばれる学問芸術を誕生させた。ブラックボックスのようなギリシャの「暗黒時代」に何があったのかは不明であるが、ギリシャ人たちは壊滅的な破壊から立ち直り、海を舞台に活動を再開して、地中海や黒海沿岸に植民市を作っていたことがわかっている。世界の歴史⑤「ギリシャとローマ」によると、ギリシャとオリエントとの交渉再開は、フェニキア人がギリシャ世界に到来するという形で始まった。前 820 年頃にキプロス島にフェニキア人の植民市が築かれ、前 9 世紀を通じてフェニキア人の同島への移住が進んだという。キプロス島からクレタ島やギリシャ本土に出向くフェニキア人もいたに違いない。フェニキア人は前 814 年にはカルタゴに植民し、イベリア半島のマラガやアドラに定住するようになっていたこともわかっている。

ギリシャ人は海の民フェニキア人と接触し、フェニキア文字をベースに新しいギリシャ文字（アルファベット）を創造し、その文字を使用して前 6 世紀には人類初の哲学・芸術・科学の花を咲かせ、人類に知性の曙をもたらした。古典ギリシャの誕生は、おそらく外来の旧文明破壊者と生き残りの住民たちとの共同作業によるものだったのであろう。

ヨーロッパの中世 では、ヨーロッパの中世はどうだったのか。ギリシャの場合とは違い、古代ローマ帝国滅亡の事情は詳細に知られている。滅亡後支配者を失ったヨーロッパの旧帝国領へは後続のゲルマン諸民族が相次いで侵入し、帝国の本土であったイタリア半島も徹底的に破壊された。長きにわたる暗黒時代に沈んだあと、14 世紀後半から古代への復興を合言葉に新しい文化の創造に向かい（ルネサンス）、ついに地中海世界を出て大航海時代へと船出する。ギリシャ中世では闇の中で見えなかった道程が、ヨーロッパ中世では考古学や歴史学の成果によってかなりの程度見えている。ギリシャ中世の夜明けとともに登場した輝かしい古典古代のギリシャと、ルネサンス後の近代ヨーロッパは、どちらも後に普

遍的で世界支配的な文明を導いたという点で共通している。

古代の完成型と考えられるローマ帝国の支配は、後進地域だった北西ヨーロッパの内陸部にまで先進文化をもたらした。そのローマ帝国がゲルマン民族の侵入によって滅亡し、破壊から再生に至る 1000 年近くの低迷・暗黒時代が残されたのである。異民族の入り乱れての侵入と戦争による破壊はそれだけ長く過酷なものであったし、反知性的なキリスト教の教義と世界観が近代へ向う知性の展開を妨げたという事情もあった。イスラム教との争い、聖と俗の葛藤、地中海と内陸ヨーロッパの指導権争いを経て大西洋に進出していくまでに、長い年月が必要だったのである。その後の世界史の展開をみれば、その間のヨーロッパのいとなみは、ギリシャ中世が古典ギリシャを創出した時間と同様、貴重な時間帯だったのであろう。

夜明けを迎えたあとの西ヨーロッパの発展は急速であった。15 世紀と 16 世紀はルネサンスと宗教改革、そして大航海による世界の発見へと、近代へ向けて激しく動いた時代であった。その後の世界史の展開は、ヨーロッパ文明による世界支配の時代となっていくのだが、その近代ヨーロッパを育んだ中世とはどんな時代であったのか。近代ヨーロッパが生まれ出た中世を、観光現象誕生への前史として概観しておきたい。

1) ヨーロッパの誕生

もともとユーラシア大陸の西の端、大西洋と地中海に面する西ヨーロッパには、有史以来中央アジアの草原地帯から繰り返し様々な人間の集団が侵入してきていた。地中海から北上してこの地域を征服・支配したローマ帝国は、ライン川とドナウ川沿いに防衛線をひいて強大な力で蛮族の侵入を押し戻していたが、4 世紀には帝国が東西に分裂し、力を失った西ローマ帝国は 476 年に滅亡した。ここからヨーロッパの中世が始まる。東ローマ帝国はその後も存続するが、西方ヨーロッパは 8 世紀にフランク王国を保護者として東方の旧世界と決別し、独自の歩みを始めることになる。

民族流動の時代 4 世紀後半、弱体化した帝国領ヨーロッパにはゲルマン諸族が次々に侵入して西ローマ帝国を滅亡に追い込み、北アフリカにまで達したヴァンダル族、イベリア半島に王国を建てた西ゴート族、イタリア半島に居座った東ゴート族、ガリアの中央部に建国したブルグンド族などが勢力を競った。ブリテン島にはアングロ・サクソン族が先住のケルト族を破って住み着いた。ゲルマン民族のうち、ライン川の東部にいたフランク諸族は民族移動期にライン川を越えて西方に移動し、フランク諸族を統一し、初代のフランク王クロヴィス 1 世が西ヨーロッパに最初の支配権を確立する(486 年、メロヴィング朝)。

西ローマ帝国が滅んだ後も、コンスタンチノーブルを首都とする東ローマ帝国は健在で、旧ローマ帝国の東半分を支配していた。ユスティニアヌス帝(在位 527～565 年)の時代には、イタリア半島の東ゴートと北アフリカのヴァンダルを攻めて滅亡させ、さらにイベリア半島の西ゴート族の内紛に乗じて同半島の東南部をも征服し、旧ローマ帝国領のうち地中海沿岸一帯をほぼ回復することに成功した。しかし、ユスティニアヌスの再征服戦争は

歴史の歯車を逆転させようとするもので、かえって長期にわたる東ゴートとの戦争によってイタリア半島の諸都市が破壊しつくされ（ローマ市も両者の度重なる争奪支配によって徹底的に破壊された）、その次にイタリア半島に侵入してきたゲルマン民族の一派ランゴバルト族にはなすすべもなく蹂躪された。

ゲルマン諸族が各地に定着した後も異民族の流入が止まったわけではなく、東方からは6世紀から10世紀にかけてスラブ、アヴァール、マジャールなどの諸族が次々に侵入してフランク王国を侵略した。8世紀はじめにはイスラム教徒がイベリア半島の西ゴート王国を滅ぼし、さらにピレネー山脈を越えて南フランスに侵入してきた。また、域内の北方辺境民族であるデーン人、スウェーデン人、ノルウェー人の北欧3種族が、8世紀後半からヴァイキングと呼ばれる略奪遠征によって海路と陸路から恒常的に南進してきていた。

紀元1000年を過ぎると新しい侵入はほぼなくなるが、ブリテン島方面への侵入はその後も続き、完全に停止するのは、1103年にノルウェーのマグヌス三世（裸足王）がアイルランド攻略に失敗して戦死したときまで待たなければならなかった。

旅と観光の視点から見ると、中世前半のおよそ500年間のヨーロッパ社会は不安定で、軍事・統治行動と最小限の商業活動、それにキリスト教の布教や巡礼などの宗教目的の移動以外に、社会は旅をする余裕をもたなかった。かくして、旅を容易にしていたローマ帝国時代の街道も宿駅も失われ、交通手段として使用されていた乗用馬車も社会から姿を消した。ヨーロッパで個人による自発的な旅行が回復するのは、12世紀に入ってようやく社会が安定して以降のことになる。

キリスト教の変貌と浸透 キリスト教は、もともとは被支配者である弱者・貧者の救いと隣人愛に依拠する宗教であった。ユダヤ教から脱皮した宗教としてローマ帝国支配下のパレスチナに誕生し、何度も弾圧されながら300年におよぶ抵抗と殉教の歳月を経て、紀元311年コンスタンティヌス帝（在位306~24年）によって公認され、テオドシウス帝（在位378~95年）によって帝国の国教とされた（392年）。ローマ帝国末期には、伝統的なギリシャやローマの神々も禁止され、帝国内ではキリスト教のみが許される宗教となっていた。かつてローマ皇帝の命令を拒否して殉教していたキリスト教徒が、180度転回し、権力に保護され、宗教の名において権力をふるう集団になったのであった。

中世ヨーロッパは、他の宗教を排除してキリスト教の絶対支配を実現していく過程でもあった。キリスト教は、西ローマ帝国が滅亡して庇護者を失った後も、教団の中核であったローマ教会を中心に民族大移動による社会の激動の中で広く西ヨーロッパに浸透し、社会に深く定着していった。古代帝国の基盤が都市であったのに対し、西ヨーロッパは森林と田園の農村地帯であり、自給自足の度合いの強い社会であった。ローマ帝国崩壊後の農民は、ゲルマン諸族の相次ぐ侵入と流民化した暴徒たちの前に無力であり、民族も国境も超えて人類に等しく来世の救済を説くキリスト教の熱心な布教が受け入れられやすかった。

フランク族の王クロヴィス1世が蛮族ゲルマンの指導者として初めて従士3000人とともにキリスト教に改宗し（496年）、フランク族の支配力が高まるにつれて、司教座都市（ロ

ローマ時代の軍事拠点都市キウィタスがキリスト教会の拠点になった）を中核にして、教会のネットワークが隅々にまで張り巡らされていく。その過程で、キリスト教会は魂の問題だけでなく人々の生活全般に係わり、ローマ帝国時代には国家が行っていた貧者の救済や病者への施療など、生活の救済にまで責任を負うようになっていった。どんな辺鄙な村にも教会が建てられ、人々は教区教会で洗礼を受け、日曜日には教会に出かけてミサに出席し、結婚式や葬儀には司祭が立会った。西欧の人々にとって、日々の行い全般にわたってキリスト教なしには過ごせなくなっていたのである。十字架がキリストの、そしてキリスト教の印として広まり、教会の網の目の広がりによって、教会の鐘が毎時を伝えるのみならず、ゆりかごから墓場までの儀式において鳴り響き、週の行事や年間の催事暦によって人々の生活が律せられた。国境を越え、民族や人種、言語に相違があっても、ヨーロッパはキリスト教によって一体性を保持し得たのであった。

ローマ教皇とビザンチン皇帝 キリスト教徒を導き、教会を統括するのはローマ教皇であった。非合法時代のキリスト教会が、いつどこに最初に出現したかを教える記録は残されていないが、教団として公認される頃にはローマ、エルサレム、アンティオキア、アレクサンドリア、コンスタンチノーブルの5都市の教会が5大拠点になっており、その中でローマが最も高い権威を認められていた。ローマ教会がキリストの第一使徒ペテロによって建てられ、マタイによる福音書（16章18-19節）によって、イエスがペテロにすべての信者の司牧権を托し、ローマ教会を首位としたと教えられていたからであった。

宗教における至上権を認められていたローマ教会であったが、ローマ教会も教会の一つであることに変わりはなく、キリスト教公認以来、世俗のローマ皇帝が教会政治についても支配権を及ぼし、司教の任命もローマ皇帝の承認を得て効力を発揮するならわしになっていた。世俗の皇帝による教会の支配は、当初こそキリスト教の発展に大いに役立ったが、やがて軋轢を生むときが来る。まず東ローマ帝国（コンスタンチノーブルの旧名をとってビザンチン帝国と呼ばれる）の皇帝が、西方のローマ教会に対しても名目上の支配権を有したことが様々な問題を起こすことになる。

ランゴバルト族のイタリア侵略後、ビザンチン帝国に残されたイタリア半島の支配地は、ローマとナポリとラヴェンナ、それに南イタリアの先端部にわずかの拠点を残すだけとなって、ビザンチン帝国軍は破壊されたイタリア半島を放置して撤退した。東ゴート族はまでもキリスト教を尊重していたが、ランゴバルトはローマ教皇権など問題にしなかった。武力をもたないローマ教皇は保護者であるビザンチン皇帝を頼るしかなかったが、ビザンチン帝国には、もはや教皇の要請に応じて兵を送る余裕がなかった。もはやビザンチン皇帝に頼ることは出来ないと知った教皇は、教皇権の進む道は蛮族から身を守るのではなく、彼らをローマ教会の支持者に変えることにこそあると発想を転換し、積極的に西北ヨーロッパに目を向けるようになった。また、イスラム教の進出によって5大教会のうちアンティオキア、エルサレム、アレクサンドリアの3教会は政治的には異教徒の支配下におかれていたために、なおいっそう西方への展開を目指さなければならなかったのである。

ヨーロッパの独立 ローマ教会とビザンチン皇帝との対立が噴出するのは、725年に皇帝レオ3世が「聖像破壊令」を出したときである。ローマ教会は早くから布教のために聖像を用いることを認めていたから、皇帝による教義への干渉に対して激烈な反対運動を展開した。しかし、ビザンチン皇帝も強硬で、ローマ教会の仇敵ランゴバルトと手を結んでまでローマ教会を服従させようとした。ここにいたって教皇権は、ビザンチン帝国を捨ててフランク王国につく決意を固め、当時フランク王国メロヴィング朝の実権者であった宮宰カール・マルテルに接触し、フランク王を教皇権の保護者として認めようと提案した。教皇権とビザンチン帝国との絶縁を覚悟した上での提案であった。この時点のカール・マルテルは、ガリアに侵入してきたイスラム軍と戦うためにランゴバルトと手を組んだばかりだったため教皇の提案は実現しなかったが、その意味するところは重大であった。ビザンチン帝国との断絶のみならず、教皇庁の伝統的政策の放棄をも辞さないことを示唆するものであったからである。

ついで 751 年、ランゴバルトがビザンチン帝国の総督府があったラヴェンナを奪い、ローマ侵略の危機が目前に迫ったとき、教皇はフランク王になっていたピピン3世（カロリング朝の創設者）を北フランスの宮廷に訪ね、ランゴバルトからの解放を懇請した。カール・マルテルの子ピピン3世は 754 年に大軍を率いてランゴバルトを攻め、ラヴェンナを奪い返してイタリア半島を解放し、史上有名な「ピピンの寄進」によって、ラヴェンナを含む北・中部イタリアの土地を教皇に寄進した。これがその後の教皇領の基盤となり、この時をもってローマ教会は実質的にビザンチン帝国との関係を断って独立する。言い換えれば、ヨーロッパは文明の発祥・発展の地であった東方世界と縁を切り、独自の道を歩み始めたのである。

教皇と神聖ローマ皇帝 ピピン3世は 751 年にメロヴィング王朝から王位を奪うに当たって、時の教皇から塗油を受けてその行為の正当性を保証されていた。ランゴバルト討伐の承諾はそのことへの恩返しでもあり、討伐に出立する前に「ローマ人の^{パトリキウス}保護者」の称号を受けている。そして、ピピン3世の子カール大帝（シャルルマーニュ）は、774年にランゴバルトを滅亡させてその王位を兼ね、スペインのイスラム教徒を攻めてスペイン辺境伯を置き、ドイツのゲルマン諸族を征討し、さらにアヴァール人をも破って西ヨーロッパ全域の支配者となった。

西ローマ帝国滅亡以来かつてなかった西方世界の大統一であり、紀元 800 年のクリスマスには、単なるパトリキウス（保護者）から教皇レオ3世（在位 795～816）によってローマ皇帝として戴冠した。堀米庸三によれば、ほんとう意味でのヨーロッパの歴史はこの時を境に始まり、以後ヨーロッパの中心が地中海を離れ、かつての蛮族の支配地だった北西ヨーロッパに移っていくことになる。カール大帝の時代を中心とするカロリング朝時代は、後世カロリング・ルネサンスとも呼ばれる文化の復興を目指す安定した一時期をともなったものの、カール大帝の死後、大帝が残した巨大な空間は孫の世代に3分割され、その領国がのちのフランス、ドイツ、イタリアの土台となり、ブリテン島はアングロ・サクソン

を追って入植したノルマン人のものとなった。最終的にイタリアとローマの支配権を確保したドイツのザクセン家のオットー1世（在位 936~73）が、時の教皇ヨハネス 12 世によって改めて「ローマ皇帝」に戴冠され、これによって神聖ローマ帝国が誕生した。神聖ローマ帝国といっても、実態はフランス国王、イギリス国王と同列のドイツ国王が兼ねているに過ぎなかったのだが、かつて教皇が東ローマと決別する際にフランク王を保護者として以来、教皇権が宗教界においてそうであるように、俗界においては神聖ローマ皇帝が王国や民族を超越した《統一ヨーロッパ世界》を象徴する理念の帝国として存続した。堀米庸三は「西洋中世世界の崩壊」の中で、ヨーロッパ中世は教権と俗権の2つの中心をもつ楕円形の構造をもった統一体であると説明しており、この二つの相反する権威が至上権を争うことによって、中世末期のヨーロッパに緊張をもたらすことになるのである。

2) 中世前期の旅

史書はヨーロッパ中世を、概ね 1000 年代（11 世紀）を区切りに前期と後期にわけると。前半はローマ帝国の残した文化がゲルマン民族によってほぼ完全に破壊しつくされ、暗黒時代といわれてもしかたのない逆戻りの 500 年であった。中世前半の民族移動による戦乱が続いた時代、軍事・統治行動以外の旅といえば、聖職者や修道士らによる布教ないし巡礼の旅か、修道院組織が担わざるを得なかった商業や金融目的の旅しかなかった。フランク時代の西ヨーロッパには、職業としての商業自体が存在しなかったからである。先述のとおり、カール大帝に代表されるカロリング朝の統治時代には、7~8 世紀の〈野蛮〉に対して示された「カロリング・ルネサンス」とも呼ばれる安定期もあったが、ごく短期間で終わっている。

修道院と修道僧

教会は一般信徒が集う場所であるが、修道院は世俗を離れて禁欲生活を行い、キリストに深く帰依する人たちが集まって生活する場所として発展した。世俗の東ローマ帝国が存続していた東方の修道院では、脱俗と禁欲への志向が一般的であったのに対し、西欧の修道院は世俗との関係が密接であり、曖昧であった。世俗権力の西ローマ帝国が滅亡した後の西方では、キリスト教会の司教たちが人々の支えの中心であり指導者となったために、居場所を失ったローマの名門貴族の多くが俗世の望みを捨てて教会あるいは修道院に入ったからである。しかし、俗世から宗教への参入はやがて俗世による宗教支配につながっていく。佐藤彰一「西ヨーロッパの形成」によれば、ローマ帝国時代のセナトル貴族層が修道院の上層部を占め、有力な修道院であればあるほどフランク王権との結びつきが強く、国王から様々な特権が与えられたという。それには理由があった。豪族が割拠し、強力な中央権力が存在しない段階の西欧社会では、商業や金融に携わる人々がフランク王国内を移動することすら非常に難しく、仮に移動できたとしても、至るところで通行税などを徴収されて利益はほとんどなくなってしまう。関税免除の特権を与えられていた修道院は、その広大な所領内で生産するものを売却して得たお金を貸したり、物そのものを遠隔地ま

で運ぶ商行為を通行税なしに行うことができた。言い換えれば、商業や金融が発達しにくい戦国状況の中で、修道院のみが交通運輸をとまなう世俗的な活動に従事できたのであった。特権をもたない商人は、満足に遠方への旅にも出られず、ましてや住民の大多数を占める農民は村を離れることもなく、人の移動の少ない閉鎖的な社会にとどまっていた。

修道院のもてなし 中世前期の困難な時代にあえて旅をせざるを得なかった人々への宿と食事の提供は、キリスト教会と修道院の仕事であった。宿泊施設がなかった中世前半の時代、旅行者にとってキリスト教の浸透は好都合であった。旧約・新約聖書が困っている人を助けるよう命じていたからである。キリスト教徒はだれしも異邦人を隣人のように愛することを要請されていた。貴族や教会幹部などの支配階級や上流層は、それぞれ行く先々の同僚や友人知人あるいはその伝手を求め、相互に協力しあって仲間や土地の支配層などの個人宅に宿泊していた。しかし、そのような伝手のない個人や巡礼目的の旅人が当てにできたのは、組織的に旅人の受入れを行なう修道院だけであった。困っている同胞には宿や食事を提供しなさい、というのがキリストの教えであったから、共同体の指導者や助祭、未亡人といった人たちは、隣人愛に基づく任務を自覚していたし、それ以外でも個人の善意による受入れも当然行なわれていたであろう。しかし、そうした記録は残されていないから、この時代の旅の状況を推量する材料は修道院の記録のみである。修道院には読み書きのできる者が多くいたし、修道院の記録は特別の保護のもとにあつて、散逸することが少なかったからである。

ベネディクト修道会の会則 ノルベルト・オーラー著「巡礼の文化史」によれば、ヌルシアのベネディクトス（480 頃～547 年、ベネディクト修道会の創設者）が 530 年頃に定めたベネディクト会の会則第 53 章（客人の受入れについて書かれている）は、816 年にカロリング王国内のすべての修道院に適用されていたが、それ以後の西ヨーロッパにおいて、何百年にもわたって効力を維持したという。会則第 53 章の規定とは次のようなものである。

修道院に来るすべての客はキリストのように迎えられる。なぜなら、その人はいつの日かこう言うだろうから。「私はよそ者だった。そして、あなた方は私に宿を提供した」。あらゆる人に、その人にふさわしい敬意を示しなさい。同信者や巡礼者に対してはなおさらに。客の到着が告げられたらすぐに上長と兄弟たちが対応し、キリスト教徒としての愛の義務を完璧に果たすこと。まず、互いに祈りを交わし、続いて平和の口づけをする。…貧者や巡礼の姿でこそキリストが迎えられるのだから、そういう人たちの受入れにはとくに注意を払いなさい。富者の場合には来訪しただけで敬意を表させる力が働くのだから。…（客用の住居には）十分なベッドを備えなさい。

新約聖書のマタイによる福音書第 25 章 35～37 にはこう書かれている。「おまえたちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてきてくれた。」

弱きものに対してそうしない人々は、最後の審判において永遠の罰を受ける、とも書かれている。福音書に忠実に生きようとするベネディクト会の会則は、あるべき姿を説いているのであって、いつもそのとおりに行なわれたわけではないが、修道院は不特定の同胞信徒の旅人に宿と食事を提供するほとんど唯一の組織であった。多くの修道院で、客は宿と暖かい食事をあてにできたが、どの程度のもてなしができるかは修道院の経済力次第でもあった。修道者たち自身がぎりぎりの生活をしているところが多かったので、立ち寄る客の全てに必ずしも充分のもてなしが出来るわけではなかった。「巡礼の文化史」第7章『宿ともてなし』には、客の側のわがままによる困惑も含め、受容れる修道院の苦勞する様が詳しく描かれている。

初期のキリスト教巡礼

キリスト教は、イスラム教とちがって聖地への巡礼を義務づけていない。また、布教の初期においては、キリストの人性よりも神性と普遍性を強調する傾向から、キリストに係わる具体的な場所や事物に重きを置いてはいなかった。それゆえ公式に聖地への巡礼が勧められることもなかったが、ローマ支配下にあった時代から旧約聖書の叙事詩的物語を共有し、かつイエス・キリストの受難と復活を伝える福音書を信仰の寄りどころとしていたから、深くキリストに帰依する人であればあるほど、受難の地エルサレムへの思いは強かった。ルカによる福音書第2章41に「(イエスの) 両親は過越祭には毎年エルサレムに旅をした」と記されている(12才のイエスも同行した)ように、都合のつくユダヤ教徒はできるだけエルサレムへ行って祝祭に参加しており、こうした習慣が聖地への巡礼の原点であったろうという。聖地を訪れる自発的巡礼は、キリスト教誕生とほとんど同時に始まったといつてよいであろう。

しかし、実際に巡礼が活発化するのには、コンスタンティヌス帝によってキリスト教が公認(ミラノの勅令、313年)されて以降のことである。熱心な教徒であった帝の母后ヘレナが聖地一帯の聖跡の発掘を奨励して多くの聖遺物を集め、聖墳墓教会を建設した(335年)頃から大きく発展を始め、古代ローマ帝国末期に国教として保護を受けるようになって、聖地巡礼は最初のブームを迎えたのであった。

ローマ帝国末期の「エゲリア巡礼記」 この時期の巡礼記としては「エゲリア巡礼記」(太田強正訳)が知られる。訳者太田の序によれば、紀元400年頃、ローマの属州だったスペイン北西部ガリシア出身の修道女エゲリアが、エルサレム(すでに聖墳墓教会は存在していた)を基点にして、周辺のソドムの町の廃墟、ヨブの墓、イエスが洗礼を受けた場所、などなどを回り、シナイ半島からエジプト、ユーフラテス川流域のエデッサにまで行っている。残念ながら巡礼記の前半は失われており、記述はシナイ半島のモーセの山に登るところからのみである。スペインからエルサレムへ至る記述がないのが残念だが、ユーフラテス川は非常に大河であるのにローヌ川のように流れが急であるとか、帰途は往路と同じ《カッパドキア、ガラティア、ビティニアとすでに知っているコース》を通してコンスタンチノ

ープルまで戻った、と書いているところを見ると、ローマ帝国の街道をはるばるガリシアからパレスチナまで陸路で往復したようである。彼女はこの巡礼行に3年の月日をかけており、ところどころでスペインの女友達に書き送った書簡の一部が後世に残されたものである。その活動ぶりは驚くべき活発さで、旧約・新約聖書の故地をつぶさに見て回っている。一例を挙げると次のような調子である。

そこでわたしは、(創世記 29 章に描かれている) シリア人ラバンの娘ラケルが草をはまさせていた家畜に、聖なるヤコブが水を飲ませた井戸はどこにあるのかを尋ねました。すると司教がわたしに言いました。「ここから6マイル離れた所で、当時シリア人ラバンの村であった場所にあります。でもあなたがお望みのようなのでわたしたちもいっしょに行き、そこには多くの極めて聖なる修道士や隠者が住んでいて、聖なる教会もあることをあなたにお見せしましょう。」

この文で、司教自身がエゲリアを案内すると言っているくだりについて、太田は、エゲリアは同じガリシア出身のテオドシウス帝の縁故者か知己であったからであろうと推測している。ほかに、シナイからエジプトに旅する際に危険がありそうな場所でローマの軍人が護衛についていると書かれているところをみても、かなり身分のある人であったらしい。いずれにしろ、このような調子がずっと続いていて、彼女の述べる感想は、あたかも近代の観光客が歴史的遺跡を巡る様に似ている。浅野和生著「ヨーロッパの中世美術」は、絵画やステンドグラスの絵に登場する聖人や伝説などを説明する中で、「エゲリア巡礼記」について多くのページを割いて彼女の行動を追っている。浅野は、この時点で聖書に出てくるすべての場所に聖堂が建てられていること、彼女が団体で行動している部分も多くあること、現地の解説者がいたり、案内人がいたりする様子から、一種の観光産業のようなものが成立していたようだと書いている。エゲリアが様々なキリストの遺跡訪問を楽しんでいる様子は、ほとんど観光とっていいだろう。宿も旅程に沿ってあったようで、ローマ帝国の治安維持がまだ保たれていた時代であったからこそ可能であったのだが、キリスト教巡礼者の行動の詳細が窺われる得がたい証言である。

ただし、西ローマ帝国が滅亡してからは、このような西欧からエルサレムに至る長途の巡礼は極めて困難になり、当然ながら巡礼たちの気持ちもローマ時代とは様変わりしていくのである。

中世前半の巡礼 聖地エルサレムがイスラム教徒の支配地域に入った(637年)あとも、イスラム側は宗教の自由を認めており、キリスト教徒の巡礼を妨げることはしなかった。それゆえ、ビザンチン帝国領内や近隣諸国に住むキリスト教徒はもちろん、激動の西ヨーロッパからさえ、修道士や信仰心厚い信徒の中には、はるばる聖地エルサレムにまで巡礼に出かける人も結構いたとされるが、具体的な記録はほとんど残されていない。

中世を通じ、一般の人々にとって巡礼は唯一の旅の機会であった。旅の施設やサービスが無かった時代だから、前述のとおり、修道院が巡礼者たちの宿泊を受け入れていた。修

道院以外に、一般人の家庭でも「異人歓待」という風習によって旅人を泊めていたが、これについては「旅の施設とサービス」の項で採り上げる。

スティーブン・ランシマンの「十字軍の歴史」によると、10世紀前半までは西欧からエルサレム巡礼に陸路で行くのは不可能で、海路コンスタンチノーブルまで行ってから陸路をとるか、シリアまで直接船旅で行くかのどちらかであったが、船旅は危険で船賃は高く、席を確保すること自体が難しかった。それが、975年にマジャール族のハンガリー王家がキリスト教に改宗したことによって陸路も通行可能になり、巡礼者はドナウ川を下り、バルカン半島を横断してコンスタンチノーブルまで行けるようになった。このことはこれ以後のエルサレム巡礼に大きな便宜をもたらし、11世紀には、セルジューク・トルコが小アジアを占拠した最後の20年間を除き、巡礼旅行者の波は東方へ向けて果てしなく流れ出ていった。彼らはときには1000人を超える団体を組んで旅をし、あらゆる年代、あらゆる階層の男女が、この時期1年あるいはそれ以上の時間を喜んで旅に費やしたという。彼らはコンスタンチノーブルで休息し、西方のどの町より10倍も大きいこの大都会を賞賛し、この町に沢山ある聖遺物を尊敬の念をもって見つめた。イバラの冠、縫い目のない衣服、聖ルカが描いた聖母マリアの像、洗礼者ヨハネの毛髪、その他無数の聖人、預言者、殉教者の身体の部分などなど、キリスト教徒にとって最も聖なる品々が数限りなくここに保存されていたからであった。

巡礼者たちはコンスタンチノーブルからパレスチナへ向い、ナザレ、タボル山、ヨルダン、ベツレヘムを訪れ、最終目的地エルサレムでは市内のあらゆる聖所に参拝し、すべてを見つめ、至る所で祈りを捧げたのであった（ランシマン「十字軍の歴史」）。ちなみに、コンスタンチノーブルにあったこれらの聖遺物の数々は、第四次十字軍がコンスタンチノーブルを攻めて陥落させたとき、多くが西ヨーロッパに持ち去られている。

ただ、こうした巡礼の成功は、無防備の巡礼者が安全に移動し礼拝できる程度にパレスチナとビザンチン帝国が安定していることが前提であった。その条件がセルジューク・トルコの台頭で崩された結果、聖地への通行を確保するという名目の下に、中世前半期に少しずつ力を蓄えていた西ヨーロッパの封建諸侯による十字軍が派遣される展開となるのである。

巡礼以外の中世前期の旅

中世前期では、個人的動機の旅といえばほぼ巡礼だけといえそうだが、ノルベルト・オーラー「中世の旅」は、巡礼以外の旅についても紹介している。同書は2部構成になっていて、第1部は旅の諸条件の解説、第2部は文献を通して窺える《旅する人々》の描写にあてられている。旅の諸条件についてはあとでまとめて紹介するとして、ここでは同書の紹介する巡礼以外の中世前期の旅をみてみよう。もともと中世の旅を記録した文献はきわめて乏しく、冒頭にオーラーは「中世における旅のありようを思い浮かべようと思えば、たくさんの文献の材料から石ころを拾い集め、モザイクのように全体像を組み立てなければ

ばならない」といっている (P204)。同書は中世に旅をした人々を網羅して、「戦士と商人、奴隷と人質、追放者と使者、間諜とスパイ、泥棒と人殺し、花嫁探しに出かける仲人と巡礼、信仰上・政治上の亡命者、老若男女、達者な人と病人…」のように列記しており、文献に現れる旅の記録を拾い集めている。この時期に巡礼以外に旅をした人々の記録が残っているとしても、それらは王侯貴族か教会や修道院などの聖職者にはほぼ限定されているのだが、まずは、同書の紹介する巡礼以外の旅人の様子を見てみよう。

貴族の逃亡者 最初に紹介されているのは、西ローマ帝国滅亡からさほどたっていない時期のガロ・ロマン (のちのフランス) の名家の出のアッタルスなる人物が、515 年頃さる契約を保証する人質としてトリニアの王族のもとに送られる。しかし、相手方の揉め事に巻き込まれて奴隷に売られ、蛮族アヴァール人の馬丁として働かされていたが、伯父にあたるラングレー司教が救助を画策し、司教の料理人レオを差し向けて二人を脱走させる。騎馬による追手を避けながら、直線距離でおよそ 200 km 離れたランスにたどり着くまでの話が詳しく描かれている。

逃亡者であって旅人ではないが、彼らの逃避行をみれば、ある程度当時の旅の様子が想像できるというわけである。夏の盛りで夜も明るく、幸い寒さは気にならないので、できるだけ昼間を避けて夜移動し、橋は関所同然だから避け (橋はめったになかった)、板切れと盾をボードとして使って川を渡った。追手を恐れ、追いはぎを恐れながら、人々の親切に助けられての逃避行であった。アルプス以北ではすでにローマ時代の宿泊制度は消滅していて宿屋はなかったが、人々は親切で、聖職者や修道士、スラブの婦人などに食事や隠れ家を与えられながら、かろうじて生還した。一番の問題は食事だったが、アヴァール人のところでは馬丁にも肉を食べさせていたのか、逃避行のさなかにも川で魚をとろうとする風はなく、もてなしを受けても肉が食べられないことを嘆く場面が出てくる。

オーラーによれば、民族大移動期には名門出の人々が何千人も拉致されたり、人質として交換されたり、一方的に取られたりした。ひどい扱いを受けることが多かったから逃げ出す者も多かったが、成功したのはわずかであったろうという。オーラーは、アッタルスと料理人レオの逃避行は稀な成功例であり、記録として残されたさらに稀な一例であると言っている。

聖ボニファティウスの布教と伝道の旅 次いで取り上げられているのが 8 世紀のボニファティウス (675? ~745) の旅である。ボニファティウスはイングランド生まれの修道士だったが、故郷での安定した生活より、大陸での教会組織者ないし伝道師になる道を選んだ。教皇グレゴリウス二世 (在位 715~31) によって司教に叙せられ、伝道の使命を与えられて、フランク王国に編入されたあと改宗が進展しなかったチューリングゲンやヘッセン地方に赴いた。フルダをはじめとする大修道院や司教座の創設に係わり、フランク王国と教皇の仲介役を務めるなど、本人自身 716 年から 754 年まで、40 年近い年月を今日のフランスとドイツの諸地域で伝道や聖職者の使命を果たす旅を続け、ローマにも 3 度行っている。

ボニファティウスが自身の旅についてあれこれ書き残しているわけではなく、彼の書いた書簡や彼が受け取った沢山の書簡が残されていて、そこから旅の様子が窺い知れるということである。そもそもキリスト教会は、旅の辛苦というものを認めなかった。キリストの苦難を想えば、布教のための旅はどんな僻地や危険な場所だろうと辛いとは言わせなかったのである。司教を叙任したり教会を奉献したり、あるいは信者に堅信礼を与えるなどの司教の義務を果たし、教会会議に出席し、書物を手に入れる旅に出る場合でも同じであった。だから、旅の辛さや危険を恐れるようなことはなかったのだが、オーラーはボニファティウスの旅そのものではなく、旅の危険を窺わせる逸話を紹介している。

ひとつは女性が旅することの危険である。古代後期から罪の許しを受けるためにローマ詣でをする女性も少なからずいた。ボニファティウス関連の書簡集の中に、さる尼僧院長がローマ巡礼を希望して、彼に意見を求めているものがある。尼僧院長は、自分は年を取り、他の方々以上に多くの過ちを犯しているので、ローマへ行って罪の許しを得る旅を企画しそのたびに叱られた、と言い、ボニファティウスの意見を聞きたがったのである。この人への返書は紹介されていないが、2年後その娘で後継者である女性から同じ趣旨の助言を求められ、「そなたの巡礼を禁じもしませんが、安心して勤めもしません」と答え、サラセンの危険がなくなるまで忍耐と辛抱をしなさい、と総じて慎重な行動を勧めている。また、カンタベリー大司教にあてた書簡では、女性の巡礼についての危惧を述べ、教会主義と王命により、既婚婦人と修道女のローマへの巡礼を禁ずるよう進言している。女性の旅は、この時代男性よりはるかに大きな危険に晒されていたからである。ボニファティウスは長年の旅で観察したところを述べ、他の人とも意見を交換した上だとして、ローマ詣での女性巡礼のほとんどは墮落し、清浄な女性のごくわずかだったと書き、「…と申しますのは、ロンバルディア、フランク、ガリアの地方で、アングロ族出身で姦通女、娼婦のいない町は非常にわずかしかがございません。それは貴教会にとって不快であり、恥ずべきことでございます」とまで言っている。なお、関哲行の「中世：旅する人びと」に、8世紀にフリウリの宗教会議で修道女の巡礼禁止が決められたと書かれているから、ボニファティウスの提言が入れられたのかもしれない。(未確認) 関 p243

もう一つは、旅の紹介状についての話である。ボニファティウス自身最後には追剥に殺されてしまうのだが、旅の安全には当初から慎重な配慮を行っていた。まず、大陸に伝道に出る前にウィンチェスター司教ダニエルに紹介状を書いてもらっている(718年)。ダニエルは《きわめて敬虔にして恵み深き諸国の王、すべての大公、尊敬する司教諸卿、ならびに神を畏怖する修道院長、司祭、キリストの御名に刻印された息子たち》に宛てて、神の定める客あしらいの義務を、全能の神の僕であるウィンフリート(教皇からボニファティウスの名を与えられる前の名前)に示すことを求めている。また、活動を始めてからは、グレゴリウス教皇自身や、フランク王国のカール・マルテルの紹介状も得ている。カール・マルテルは、紹介状の中で、ボニファティウスは常に王の保護下にあり、道中彼が妨害されたり、不利な扱いを受けないよう配慮することを命じている。また、ボニファティウスは、

本人が始終旅をただけでなく、使命達成のために信頼できる人を各地に頻繁に派遣しており、自身が派遣する使節には、もてなしを求める丁寧な紹介状を持たせている。オーラーは、紹介状はラテン語が読める者にしか通用しなかっただろうが、少なくとも、旅する聖職者が現金を携帯する必要がなくなること、追剥に金銭を奪われる心配も無用になることが重要で、別の言い方をすれば、このような紹介状は、今日のクレジットカードのような役割を果たしたのだという。それでも当時は民族激動の時代で、大陸を移動する多くの聖職者たちが命を落としている。745年には、80歳になったボニファティウス自身が仲間とともにライン川を下ってフリースラント（今日のオランダ）に布教に赴き、その地で盗賊に襲われて命を落としたのであった。

旅する聖職者たち ボニファティウスは別格の国際旅行者であったが、通常の聖職者たちも頻繁に旅をした。司教たちは堅信を受け、教会を聖別し、教区、修道院を定期的に巡察することを義務付けられていたからであり、そのための旅は長旅になることが多かった。オーラーが事例として紹介するアウグスブルグの司教ウルリヒの旅をみてみよう。

イタリアでは司教区は一つの都市とその周辺を単位に置かれていたが、ドイツにはそれほど数の司教区がなく、ウルリヒが50年間（923～73）司教を務めたアウグスブルク司教区の広さは南北230 km、東西も100 kmを超えていた。彼は4年ごとに司教区巡察の旅に出ていたほか、帝国司教区を預かる身として宮廷会議には必ず出席し、司教団の一員として教会会議への欠席も許されなかった。のみならず、自身の魂の救済のための旅も欠かさず、ローマへ何度も旅をしている。彼の伝記にそれらの旅の記録が残されているが、最初のローマ行きは909年、19歳の時であった。この時の旅の経過や宿泊のこと、難事のアルプス越えなどについては、格別注目すべきこともないとして記載されていないが、971年38歳の時に《敬虔の念から発し、おのれの魂の救済のために聖ペテロと聖パウロの墓を訪れようと思って》出かけた3度目のローマ行きについては、旅の様子が詳細に書かれている。アルプス越えは、はじめは車で行ったが山中では困難になり、数頭の馬が運ぶ寝台に寝かされて旅を続けたと書いている。西欧の文献ではめったに出てこない駕籠まで臨機応変に作って用いている。通常帝国の諸侯や司教は威風堂々と馬に乗って旅をしたのだが、ウルリヒ司教は、4年毎に行なう司教区内巡察の旅でも、車体に鋼索で専用の椅子をとりつけた車に乗って行ったと書かれている。馬に乗って行けなかったからではなく、大勢引き連れた供の者たちのくだらないおしゃべりで祈りが妨げられるからだという。ちなみにウルリヒ司教の供には、毎日荘厳なミサが行えるよう経験を積んだ司祭と助祭2～3人、それに有能な臣下数人が付き従ったほか、挽曳動物を引く者や車の左右を警備する隷属民もいた。警備の人々は、おそらく司教への貢物を運ぶために同行を命じられた者たちだろうとオーラーは推測している。このほかに、司教区の民も馬や徒歩で供をしていたから相当な行列になり、この行列が人々に尊崇の念を起こさせたのである。当然ながら道のりは周到に決定され、従者が宿の手配をし、人馬用の食糧はアウグスブルグ教会領の農場から取り寄せさせたのだが、こうしたやり方が王侯や特権ある重要人物の当時の旅の仕方であ

ったと思われる。

オーラーは、他にも時代を追って司教たちの旅の様子を紹介しているし、司教区内の司祭たちは司祭たちで、地方教会会議のために定められた日に集るべく旅をしていた。今日でいえば教会という組織の維持発展のためのビジネス旅行に相当するのであろうが、このような地道な努力が、全ヨーロッパの農民を含む大衆をキリスト教の敬虔な信者に育てていったのであった。

学問と教養の旅 「西フランク史」を書いたことで知られる年代記作家のランスの修道士リシェは、自作の中に自分自身のランスからシャルトルへの旅のことも書き込んでいる。旅に出ることになったいきさつは、シャルトルの大図書館にいる文通の友から、望みの図書を心行くまで読むためにシャルトルに来てはどうかとの望外の招待を受けたのである。幸い修道院長の許可が得られ、招待状を持参してきてくれた使者と、荷物の世話をさせる若い従者の3人が騎馬でシャルトルへ向うことになった。991年3月のことである。リシェは学者としてヒポクラテスの古代テキストから医学を学びたいと望んでいた。当時古代のテキストはどこでも慎重に保存された1巻の写本しかなく、読みたいと思えばそれを所蔵する修道院・図書館に遠路出かけなければならなかったし、そのためには特別の計らいが必要であった。

初日3人は、50 kmほどを騎行してオルベの修道院で宿泊し、もてなしをうけた。修道院は荒野における平和の孤島のようなものであった。翌朝一行はモー（パリから東方60 kmほど）へ向けて旅立つが、途中の森で道に迷い遠回りをしてしまう。道もろくにない森の中に道標を立ててくれる者がいるはずもなく、慎重にことを運んでも十字路で選択を間違えることは大いにあり得ることであった。荷馬の足が次第に鈍り、2日で100 kmという強行軍に耐えられず突然倒れて死んでしまい、さらに悪いことに篠つく雨が降り出した。やむなく、若い従者を荷物とともに残し、泥棒や追剥を心配してあれこれ注意を与えた上で、いったん2人だけでモーまで行くのだが、ここで橋を渡る話が出てくる。夕闇迫る頃にモーにたどり着いたが、この町のマルヌ河にかかる橋は地元の間でも危険で渡れぬほど傷んでおり、大きな穴があちこちに空いていた。小船を捜したが見つからず、決死の覚悟で橋を使って馬を渡すことにする。穴のところには馬の脚が落ち込まないように板きれや盾を敷き、かがんだり立ち上がったたりしながら、神のご加護を得てかろうじて無事対岸にたどり着いた。暗闇の中をモーの修道院にたどり着いて暖かく迎えられたあと、ランスにきてくれた使者に若い従者を迎えに行ってもらう。使者は例の穴ぼこだらけの橋を再度危険を犯して渡り、真夜中に大声で呼ばわって従者を探し出した。帰途はさすがに橋をさけて手前で1泊し、翌日まんじりともせず待っていたリシェのもとに無事到着した。馬を失った若者をモーに残していった二人だけでシャルトルへ向い、シャルトルに着くと馬を返して若者を呼び寄せ、その到着をまって医学の書の勉強にとりかかったのであった。

オーラーによれば、数世紀の間リシェのように知識欲に燃え、教養に飢えた人々が機会さえ与えられれば旅に出たのだという。「彼らは写本を読み、教師の話聞き、忠告を求め、

異国と異郷、はるかなる記念碑と芸術作品にまみえたいと思ったのである。(中略) …学問の好奇心を満たしたり、人生の問題の解答を得ようとする場合、人は長旅の不自由や危険を甘受する覚悟は出来ていたのである」 p 392。

中世における知識人は、修道士もしくは聖職者の中にしかいなかった。王の宮廷にいる知識人たちも、もとは修道院や教会付属の学校で教育をうけて登用された人たちであり、彼らの中の知的好奇心の人一倍強い人たちが、数は少ないとはいえ、混乱の民族移動の時代でも、本を求め、師を求めて旅をしていたのであった。

中世ヨーロッパにおける学問と教育 ここで中世の学問と教育の状況をざっと見ておこう。カルロ・M・チポラ「読み書きの社会史」(佐田玄治訳)によれば、ローマ帝国末期には、主要都市に公費で学校が建てられ、公費で雇用された教師がいたという。教育がすべて公立になったというわけではなく、家庭教師を雇う余裕のない人にも初等教育を受ける機会があったということである。農村は置き去りにされたが、都市に関する限り密度の高い学校網が張り巡らされていたらしい。しかし、ゲルマンの侵略者たちは、識字教育の伝統も教育への共感も持ち合わせていなかったから、こうした教育制度は政治的な混乱と無秩序のうちに崩壊し、識字力も惨憺たる状態に落ち込んでいった。

かくして中世前期にあったのは、教会と修道院だけが識字文化を絶滅から救いうる存在であった。紀元 537 年、トレドの第二公会議は、全司教に対して教会内の聖職者となるべき児童を教育する学校の設立を命じており、幾人もの聖職者たちが、この時期敵意さえ見られる中で、若者の識字教育のために精力的に働いていた。「読み書きの社会史」は、10 世紀までのカロリング朝の宰相や王の十中八九は文字が書けず、カール大帝自身も十字印で署名していたという。ローマ帝国末期にすでに帝国内に広範にわたって設置されていた修道院は、統一政治権力不在の中で、農業と農村開発の拠点であり、図書館を備え、多くの書物を筆写して世の中に送り出し、読み書きのできる修道士が王宮の書記に任じられることが日常的に行なわれていた (p 145)。修道院は、ヨーロッパ中世を通じてほとんど唯一の知識集団であり、学問の場だったのである。

紀元 800 年、ローマ教皇によってローマ皇帝の称号を得たカロリング朝のカール大帝(シャルルマーニュ)は、帝国政策の一翼を担う存在として修道院を各地に建て、勅令によって修道院に学校を付設させた。学問を奨励し、修道士たちを官僚として活用した。若者たちは学校で三学四科の自由学科(リベラルアーツ)を学んだ。三学とは文法(ラテン語基礎)・修辞・弁証(論理)の三種の学、四科は算術・幾何・天文・音楽の四科であった。このうちとくに熱心に学ばれたのは文法と修辞学であった。生徒たちの多くは、これらを学んで公文書の扱いに通じ、官僚として世に出ることを望んだからである。また、修道士たちは教師となり、知的伝統の保護者となり、写字室も図書館も彼らの仕事場となった。身分制社会がかなり厳格であったヨーロッパで、出自を問わず出世が可能な道は学問を身につけて聖職者になることであり、そのための入り口が修道士になることであった(「宗教改革の真実」) p 120。

カロリング朝の文化奨励策によって、各地の修道院で古典の写本の製作が活発に行なわれ、この時代の写本のおかげで今日に伝わった古典作品が多いという。大帝はかくて後にカロリング・ルネサンスと呼ばれるようになる一時期をもたらしたが、大帝の帝国は孫の時代に瓦解して三分割され、それぞれのちにドイツ、フランス、イタリアを形成していったことは世界史で学ぶところである。

なお、ジャック・ヴェルジェ（大高順雄訳）「中世の大学」によれば、アルプス以北では教会と修道院に付属する学校しか存在しなかったが、イタリアにだけは在俗の学校があった。それらは私的な学校で、実情はよくわかっていないが、ローマ、ラヴェンナ、ボローニャ、パドヴァでは、三学四科や公証人の職務、現行法のなどが教えられていたこと、また、サレルノで医学が教えられていたことが知られている。12世紀後半から13世紀にかけて各地に大学が誕生するまでは、教会と修道院が学問の中心であったが、大体においてレベルは低く、初歩的な教育にとどまっていた。しかも、古典作家の講読などによって行われる自由学科の教育に修道院は反対であり、多くの修道院が「通学」学校を閉鎖し、「寄宿」学校の生徒も減らし、修道僧の知的教育は従来のやり方である写字生の地味な仕事や読書と個人的瞑想へと後退していった。p 5.

かくして、塩野七生が「ルネサンスとは何であったのか」p 59 で指摘しているように、古代のギリシャ・ローマ時代の書物は筆写されたり、保存されたりしてはいたが、キリスト教徒の読むべきものではないという理由で外部に出ることはなく、修道院の図書館の片隅に眠ったままであった。そうした状況は、ウンベルト・エーコの小説「薔薇の名前」に想像力豊かに描かれている。そして、ダンテやペトラルカをはじめとするルネサンス前期の人文主義者たちによって埋もれていた古典の発掘が行われることになるのである。

旅する王国 中世は旅する人の少ない時代ではあったが、人の移動が少ない時代だったとは必ずしもいえない。メロヴィング朝時代はいわば戦国時代で、地方領主が割拠して始終戦争のために移動していたし、カロリング朝による統一後もその分解後も、諸王は首都をもたず、宮廷ごと移動を続けていた。オーラーは「中世の旅」に《旅する王国》という一項目を設け、中世の諸王が常時旅をしていたことが年代記などの記録から窺えるという。王国の広さによるが、諸税を課すにしても、課される側が王宮にわざわざ届けてくれる時代ではなく、王のほうで廷臣を引き連れて順繰りに支配地に滞在して統治の職責を果たすとともに、その間の生活費を負担させる形で収税していたのだという。

オーラーは、カロリング朝のカール大帝の旅程を地図入りで説明しているが、45年間の治世（768～814年）のうちに、地球を何周もするほどの旅をしたと書いている。治世後半の20年間くらいはアーヘンが首都の機能を帯びようになってはきたが、定住のための王宮はもたず、固定した官庁や官僚機構もなく、文書館や図書館もつくらなかった。中世のパリがときおり首都の役割を果たしたのは、支配下の領域が小さかったから可能だったのであり、フランスもルネサンスを過ぎる頃まで、王の常住する首都をもたなかったのである。カール大帝は3000人からの家臣団に貴婦人連も加わって常時旅をしているが、それが

税を徴収するため、つまりは滞在費を土地の人間に負担させるためであったから、一行の滞在は1ヶ所あたり長くて数日程度だったという。

ただし、この当時王が楽な旅をしていたかというそうではなく、帝国年代記が書いているカール大帝の旅は、次のように描写されている。

…指導的な立場にある者はその職務の名声のために高い代償を払った。どんな悪天候だろうと彼らは旅路につき、夏でも肌まで濡れることがあった。風邪をひけばたちまち生命にかかわる肺炎になった。不潔な宿や風の吹き込む天幕に泊まった。じめじめした寝具にくるまれては夜も寝られず、のみ、南京虫、ねずみのごそごそいう音、おそらくかゆい霜やけに苛まれた。うるさい相宿についてはいわずもがなである。元気を回復する睡眠はあてにできなくても、翌日は堂々と出立する定めであった…

カール大帝にしてこのような旅をしなければならなかったのだから、当時の旅行事情がいかに変であったかが想像される。オーラーはさらに王の巡察使（802年に設けられた領国内の監視体制）の旅や帝国修道院長に命じる旅などについても取り上げているが、中世前期の旅は概して特例的な旅であり、少なくともそうした旅しか記録に残っていない。

3) 十字軍の時代：西ヨーロッパの転換期

西ヨーロッパの発展は、紀元1000年を過ぎた頃から上向きに転じたというのが歴史書の通説である。通常それ以降を中世後期と呼ぶが、その時代を画す出来事が十字軍による聖地エルサレムへの遠征であった。十字軍の遠征は宗教的行為であると同時に、参加した人々にとっては人生をかけた大事件であり、死を決しての大旅行であった。

十字軍前夜 500年におよぶ混乱と形成期を経て、西ヨーロッパの中世は、紀元1000年頃を境によりやく成長期を迎える。ジョルジュ・タート「十字軍」の簡明な記述を借りれば、この時期のヨーロッパは次のような状況であった。

11世紀の初め西欧は森に覆われ、極度の過疎状態にあった。農民は貧しく、土地に縛られていたし、城といっても木造の砦ばかりで、貨幣の流通もなかった。強力な中央集権もなければ、人々の社会関係もきわめて粗野なものだった。しかし、1000年を過ぎた頃から社会を停滞させていた異民族の侵入がやむ。人口が増え始め、農業の技術革新が起こった。農産物の収穫量は増し、飢饉や伝染病も減少した。都市に人口が集中し、農村との違いがはっきりしてきた。西欧の商人たちは遠隔地への旅を再開した。奴隷や原材料を売ってぜいたく品を買うのが目的である。コンスタンチノーブル、アレクサンドリア、シリアの海岸などでも、彼らの姿が見られるようになった。

古代ローマ帝国の時代、西ヨーロッパは未開の辺境であり、森に覆われた土地は開墾の技術を持たない人々にとって住みにくい土地であった。6世紀に全ヨーロッパを襲った黒死病の流行で激減した人口は10世紀まで回復できず、フランスの歴史学者ジョルジュ・デュ

ビイの推計によれば、1000年頃のヨーロッパの人口密度は1 km²あたりわずか2～5人であった。これは今日の日本の最も人口密度の低い北海道で72人、岩手県の92人（日本国勢図絵2009による）とくらべれば、非常な過疎地であったことが理解できる。古代メソポタミヤの農業では1粒の種からとれる収穫が76粒もあったのに対し、中世ヨーロッパは3～4粒しか取れなかったという事実からも、多人数を養うことができなかったことが理解できる（デュビイ「ヨーロッパの中世：芸術と社会」）。

厳しかった気候も11世紀の後半から徐々に状況が改善されていく。ヨーロッパで最も人口が多かったフランスで、1100年に620万人程度だった人口が急速に増え始め、1200年には900万人へと増加している。このような社会経済的発展が11世紀末の十字軍という集団巡礼を可能にし、数次にわたる十字軍派遣による東方世界との接触が、西欧に先進文化をもたらし、新しい発展へとつながっていったのであった。

聖地エルサレムへの十字軍

イスラム教の成立と拡大は即異教徒征服戦争であった。イスラム法の理念では、イスラムの主権が確立していない土地に対するジハード（聖戦）は合法であり、「イスラムの家」の拡大は教徒のミッション（使命）であった。聖と俗は一体であり、宗教と権力は分離されていなかった。これに対し、キリスト教はローマ帝国の支配下に誕生し、世俗の権力に従うことを拒否し、軍務に着くことも皇帝主催の宗教祭事に参加することも拒否し、何度も弾圧された歴史をもっている。とくに、ディオクレティアヌス帝（在位284～303年）の時代には、ローマ市民としての義務を果たさない異分子としてキリスト教が禁止され、教会の破壊、財産の没収、棄教しなければ処刑も行なわれた。それでも多くの教徒が信仰を捨てなかった。絶対的な愛を標榜して他者の殺戮を罪悪とする教えに忠実であり、自らを守るための抵抗すらしなかった。彼らの武装は信仰のみであって、権力とは戦わず、武力に対しては進んで殉教した。そのキリスト教徒が宗教の名において異教徒に大戦争をしかけたのが十字軍であった。

キリスト教と戦争 ローマ帝国がキリスト教国家に変じて権力と一体化した時点で、キリスト教徒もまた兵士として国防や征服のために人を殺さねばならなくなったのだが、矛盾はなかったのか。ランシマンの「十字軍の歴史」によると、聖アウグスティヌス（354～430）は神の命令による戦いは許されると考えていたし、ササン朝ペルシャから聖なる十字架（キリストが磔されたとされる十字架）を取り戻したとされるビザンチンのヘラクレイオス帝（在位610～41年）の戦いは、すでに神聖な戦いと受け止められていたという。異民族侵入によって西北ヨーロッパにできた武人社会は、当然のこととして戦争を正当化した。騎士道の掟が整えられて軍事的英雄に名声がもたらされるようになると、教会の利益になる戦争は聖戦となり、許されるどころか望ましいことになっていく。教会による世俗への妥協の結果ではあるが、それでも東方教会では、殉教とは自らの信仰を貫いて死ぬことであって、異教徒との戦闘による死に格別の恩恵を与えることを拒否してきたという。その東方の皇

帝が、セルジューク・トルコに対抗するための軍隊の派遣を、西方、しかも軍隊を持たないローマ教皇に要請したことがその後のヨーロッパを大きく変えることになった。

第一次十字軍の結成 十字軍遠征は、ビザンチン帝国の支配地域であったアルメニア（現在のトルコ）に進出したセルジューク・トルコに対抗するために、1095年3月、ビザンチン皇帝がローマ教皇ウルヴァヌス2世に援軍の要請をしたのがきっかけであった。軍事力をもたない教皇は、同年11月にフランスのクレルモンで開催された公会議に際し、野外の大会場に参集した各地の聖職者や俗界の貴賤の大群集を前にして熱情溢れる演説を行い、異教徒に奪われている聖地エルサレム奪還のための十字軍の結成を訴えた。ウルヴァヌス2世は、スペインのレコンキスタ（国土回復運動）支援のために派遣した十字軍と同程度の軍隊、すなわち、自分の代理の司教を総指揮官とし、フランス貴族を軍司令官とする一軍団の派遣程度を想定していたに過ぎないとされるが、エルサレムへの十字軍勧奨への反響は全ヨーロッパに及び、結果は教皇の予想をはるかに超える反応を引き起こしてしまった。多くの貴族・騎士が呼びかけに応じたのみならず、教皇のアピールに激しく反応した農民、町民を含む民衆が大挙して聖地へと向かったのである。ウルヴァヌス2世は、この時期西ヨーロッパのあらゆる階層に満ちてきていた聖地への巡礼願望に火をつけることによって、当時の諸々の社会的条件から見て、あり得ないほどの大巡礼団を立ち上がらせてしまったのである。

異教徒から聖地を奪還するという名目の軍であり、献身の証しに参加者が肩に十字架（この頃すでに十字架はキリスト教の象徴になっていた）を縫い付けていたため十字軍と呼ばれたが、貴族や騎士を含むすべての参加者が《巡礼者》とされた。また、十字軍と言えば整然とした軍勢のように聞こえるかもしれないが、橋口倫介「十字軍」によれば、実際は完全武装の戦闘員は6分の1に過ぎず、残りは農民たちがそれぞれ武器になるものを調達した半武装の貧者であり、これに女子供を含む定員外の非戦闘員を加えると数万人の規模になる烏合の集であった。軍事的に考えれば、民衆参加者は戦術的に役に立たないどころか、戦闘では足手まといの邪魔者であって、騎士身分以上の戦闘員は遠征中に民衆参加者を護衛し、彼らのために戦うことが任務にさえなっていたという。十字軍を起こす意図はウルヴァヌス2世から発したものであったが、実際に起こったことは教皇の意図通りではなく、むしろ意図に反するものであったともいわれている。実際、領土や褒賞や戦利品などの俗世界の欲望にも支えられていた領主や騎士階級よりも、純粋に聖地を目指した民衆こそ遠征団の本質をなす要素であったとする論者もいるのである。

隠者ピエールと民衆十字軍 教皇は遠征軍の出発予定日を1096年8月15日の聖母被昇天祭の日と指定したが、実際は準備の整った軍団からばらばらに出発して行った。最初に動いたのは、十字軍史で異彩をはなつ隠者ピエール率いる民衆十字軍であった。隠者ピエールは北フランスのアミアン出身で、放浪の説教者として当時民衆の人気を博していた。「風貌は渋紙色の、頬のこけた長いロバのような顔に、灰色の鋭い目がひかり、やせたからだ

には下着なしで粗毛製の隠者風の長衣をまとい、愛用のロバにまたがって歩く、小柄な男であったようである」(橋口倫介「十字軍」)。そのピエールが 1095 年の末頃から十字軍参加による聖地巡礼を勧める説教をはじめると、聖俗貴賤の別なくピエールの話に耳を傾け、わずか 3 ヶ月の間に追隨者の群れが 1 万数千人に及んだという。ピエールは支持者とともに 1096 年 4 月 12 日の聖土曜日にドイツのケルンに到着した。

彼が集めたこの大集団は、いろいろな地方から集まった雑然たる集団で、またとない聖地巡礼の機会であるから、多くの者は妻を帯同し、子供をつれてくる者もいた。大半は農民であったが、町の住民もいれば、騎士の家の若者も、あるいはかつての泥棒や犯罪者もいた。かれらをつないでいるただ一つの環は信仰への情熱であった。誰もがピエールに従うために何もかも手放してきていて、ケルンから先への速やかな旅の続行を熱望していた。問題は食糧であった。中世ヨーロッパにこんな大人数を食べさせる余裕はどこにもなかったから、彼らは絶えず移動していなければならなかった。幸いケルンは豊かな町だったので、ピエールはしばらく滞在して、さらに周辺の中小貴族を誘うが(成功はした)、一行の中のヴァルター・サンサヴォアールという者に率いられたフランス人の一行何千人かは待ちきれなくなり、短気を起こしてハンガリーに向けて勝手に出発してしまった。

以下、ランシマン「十字軍の歴史」によってピエールの民衆十字軍の行動を追ってみると、次のような具合であった。ライン川とネッカーマン川を遡って今日のウィーンに出、ウィーンからドナウ川に沿って下り、5 月 8 日ハンガリーの国境に到着する。そこでハンガリー王に対して国内通過の許可を申請した。通過の許可はその間の食糧の供給を約束することでもあった。ハンガリー王は快く迎えてくれ、問題なくハンガリーを通過してビザンチン帝国との国境の町セムリンに至り、ここでサーヴ川を渡って対岸ビザンチン領のベルグラードに入った。この後が問題であった。ベルグラードの軍司令官はいきなり現れた大軍に驚愕した。ビザンチン皇帝は被聖母昇天祭以前に軍が到来するとは考えてもおらず、まだ何の指令も出していなかったから、軍司令官は属州長官のいるニーシュに急使を派遣してヴァルターたちの到着を報告した。しかし属州長官も何も知らされておらず、コンスタンチノーブルに指示を仰ぐしかなかった。ヴァルターらは食糧を求めたが、収穫物はまだ集められておらず、駐屯地に予備の食料はなかった。食糧を欠いたヴァルターたちは国境をはさんで、ビザンチン帝国側のベルグラードと、ハンガリー側のセムリンの両方で略奪を始め、両地の守備隊と衝突して戦闘も始まった。それでも大事には至らず、ヴァルターたちはニーシュに到達した。州長官は巡礼団を引き止め、なだめ、もてなした。こうした状況になって、ついにビザンチン皇帝も十字軍の受入れと送り出しの準備を急がねばならなくなったのであった。

他方、ピエールの本隊はドイツ人たちを加え、およそ 2 万人の集団となってケルンを 4 月 20 日頃出発した。同じようにドナウ川を下ってハンガリー領に入る。船に乗った者もいたが、大半は陸路を徒歩で行った。ピエール自身はロバに乗り、騎士は馬に乗り、荷物は馬車に積んで従った。道がよければ 1 日に 25 マイル(約 40 km)を進んだという。今回も

ハンガリー王は快く出迎えて通過を許したが、またしてもセムリンで悶着が起き、ちょっとした諍いからピエールの配下が守備隊と戦闘を始め、4000 人を殺したばかりか、食糧貯蔵庫を押さえ、砦まで攻め落とすという事件が起こった。また、ベオグラードでは、市内に侵入して略奪したあと火をつけて焼き払うなどの蛮行を行なった。通過される側は、それでも相手が聖地奪還に赴く巡礼集団であり、あまりの大群でもあって、できるだけ早く通過してもらうために、食糧をはじめとする支援を行なわざるを得なかった。無知、無準備、無秩序な集団であり、指導者の思惑とは無関係に勝手に行動するのでいざこざが絶えず、コンスタンチノーブル到着前に、ピエールの軍は全体の 4 分の 1 を失っていたという。

コンスタンチノーブルでは、十字軍兵士が市内に入ることを禁止され、城外にとめ置かれたため、例によって食料を奪ったり盗みを働いたりした。皇帝は、彼らが小アジアに渡ってもトルコ人にやられるだけだと心配したが、コンスタンチノーブルに長くとどめることも出来ず、先着していたヴァルターグループを合わせ、大量の非戦闘員を含む 2 万余の集団が 8 月 6 日ボスポラス海峡を渡った。やみくもに城を攻めたり、略奪したりして当初は戦果があがったかにみえたが、本格的なトルコ軍の反攻を受けて烏合の衆はひとたまりもなく壊滅してしまった。

ケルンからはるばるパレスチナまで、地理的な知識もなく、旅の準備も予備知識もなく（ハンガリーへ入る頃には、もうエルサレムか、エルサレムへ行くにはこの道でいいのかなどと毎日のように訊いていたと記録されている）、命の危険を省みず、ただ聖地へ行きたいと飛び出した何万人もの人たちの思いとは何だったのか。罪科ゆえに地獄に落ちる恐怖をキリスト昇天の聖地へ赴くことで許されたいという思いに突き動かされた面もあったであろう。橋口の「十字軍」は、「11、12 世紀の西ヨーロッパ社会には、単調な日常生活から脱け出そうする衝動や、お祭り騒ぎに浮かれ出そうする欲求がみなぎっていた。ピエールの言動はそのような一触即発の飽和状態に火をつけ、爆発を誘ったものにほかならない」（p 61）と書いている。

燃え上がった聖地解放という理念と、聖地に至る苦難の旅という現実の間の過程が欠落しており、「歩き出せばすぐにでもエルサレムに着くという錯覚が素朴な人々を盲目にしていた」（橋口）。西ヨーロッパを出るまでは、ドイツ人がユダヤ人の迫害・虐殺事件を起こした以外は比較的順調であったが、ハンガリーや当時ビザンチン領だったブルガリアに至ると、食料不足と郊外での野営（都城内に入ることを許されなかった）の寝心地の悪さから、巡礼者たちは盗賊に、兵士たちは非戦闘員の虐殺者へと容易に変じたのであった。

エルサレムの奪還と十字軍国家 第一次十字軍の各隊は、1096 年 8 月中旬に出発したフランス王弟隊を第一陣に、翌年に出発した隊を含め 4 隊が出かけている。そのうち、教皇代理の総司令官アデマール司教が同行した本隊は、総勢 6 万人に及んだとされている。第一次十字軍は、当時トルコ系とアラブ系の対立を含むイスラム側の内部分裂にも助けられて、セルジューク・トルコ支配下の小アジアを横断してアンティオキアに入り、次々と地中海岸の都市を支配下に入れながら、1099 年 11 月エルサレムの奪還に成功した。1096 年夏にクレルモンを出発してからエルサレムまでおよそ 3000 km、3 年におよぶ年月が経過してい

た。十字軍参加者の諸侯・貴族によるキリスト教国家がシリアからパレスチナにかけて設立され、東地中海沿岸一体がキリスト教徒のものとなった。だが、本拠地を遠く離れた十字軍諸国家の維持は難題であった。

聖地の奪還という目的を達成して大半の諸侯・騎士は帰国し、残った騎士階級は 500 人程度に過ぎなかったという。十字軍国家をイスラム軍の反撃から守るにしろ、この地域に定着して国家を安定させるにしろ、不足する人員を現地で調達することは困難で、西ヨーロッパから再度の大遠征隊を呼び寄せるしかなかった。幸い、第一次十字軍によるエルサレム奪還の成功によって巡礼熱はますます高まり、二度目の教皇の勸説によって婦人や未成年などの非戦闘員を大量に含む第 1 次に匹敵する大遠征隊が成立した。だが、第 2 次十字軍と呼ばれてしかるべきこの遠征隊（1101 年に出発）は、出発時には総数 20 万人にのぼるといわれながら、小アジアで待ち構えるトルコ軍に殲滅され、エルサレムに到着したのはその中のわずか 1 % に過ぎず、エルサレムに入植したのはさらにその 1 割程度に過ぎなかった。あまりの大惨敗のため、後世の歴史家はこの企てを「1101 年の十字軍」としか呼ばず、もっと無意味に終わった 1147 年のフランス王とドイツ皇帝が出兵した 3 度目の派遣のほうに第 2 次十字軍の名を冠し、結果として二度目の大遠征は無視されてしまったのである（橋口「十字軍」）。

後続の十字軍 さらにこの後も、パレスチナに孤立する十字軍諸国家とその支配地の維持や、イスラム勢力との拠点都市争奪戦のために、繰り返し十字軍を募って派遣することになる。数次にわたる十字軍の遠征という現象は、動機、規模、移動の仕方、事後の社会への影響を考えても空前絶後の長大な旅であった。1212 年には数千人ないし 2 万人にも及んだとされる少年十字軍などという少年少女を中心とする民衆十字軍がフランスから聖地に向かっている。彼らは 7 隻の船に分乗して出発するが、2 隻は難破し、残る 5 隻は悪徳船主の手によって参加者らはエジプトで奴隷に売られて自滅するなどという悲劇的な挿話もある。最終的に、フランスの聖王ルイ（在位 1226～70）を指導者とする第 7 次（または第 8 次）の十字軍が北アフリカのイスラム勢力を攻撃するために出立するが、王自身がチュニジアで病死したことによって解散する。これが最後の十字軍派遣となり、1291 年にはエルサレムがイスラム教徒に奪還されて、200 年に及ぶ十字軍時代が終るのである。

派遣のたびに封建諸侯の徴集団と民衆巡礼団による大集団が聖地へ赴いたのだが、この時代に民衆が 10 数万人という単位で西欧からエルサレムまで 3000km に及ぶ徒歩の旅に繰り返し出かけた（第 3 次以降は船も使用された）ということは、驚くべき出来事である。十字軍については、聖職者が多数参加していて多くの記録が残されているし、対峙したイスラム側にも多くの記録がある。近代以降、西ヨーロッパの歴史的転換期としての十字軍とその時代に関する研究書は多い。それらの文献に間接的に触れてみるだけで、西ヨーロッパに沸き立つ狂気のような社会変動の息吹が感じられるのである。

4) 地中海の海運

十字軍の時代と呼ばれるおよそ 200 年間は、ローマ帝国崩壊後にゲルマン民族によって出来上がった武人型の諸国家が、ビザンチン帝国とイスラム諸国の先進文化を吸収する過程でもあった。と同時に、大量の人の移動が地中海海運を大きく成長させ、やがて大西洋へと乗り出す大発展のための力を蓄えていくのである。堀米庸三は十字軍の項の締めくくりに次のように書いている。「十字軍は直接的にというより間接的にヨーロッパの発達に影響した。そういう意味では、十字軍はいわばヨーロッパ人がほんとうの自覚に達するために要した試練だったといってよい。東西の接触によるヨーロッパ人の人間形成、これは今後のヨーロッパ文化の発展に決定的に大事なものであった。」

聖地エルサレムへの交通路 第 1 回十字軍 (1096～1099 年) は、コンスタンチノーブルに集合し、コンスタンチノーブルからセルジューク・トルコ支配下の小アジアを突破して陸路イスラム軍と戦いながら聖地エルサレムに達するルートをとった。当時の地中海には、十字軍のような大集団を船舶輸送する手段がまだなかったからである。西欧からの陸路は二つあった。一つはハンガリー経由の北方路であり、もう一つはイタリアまで南下してそのまま陸路を行くか、さらに南下して長靴半島のかかと辺りの布林ディシかバリでアドリア海の最短部を船でバルカン半島に渡る南方路で、そのどちらかを利用した。これらはいずれもローマ帝国時代の国道だったルートで、道路は甚だしく劣化してはいたが、徒歩や馬での移動なら支障はそれほどなかった。北方路の方が問題が少なく、既述のとおり、ピエールの先遣隊はコンスタンチノーブルまで 3 ヶ月半で達したが、南方陸路ではアドリア海で船が難破したり、バルカン半島の横断が難路で、到着までに 9 ヶ月もかかっている。

だが、真の問題はその先の小アジアの通過にあった。ピエールの先遣隊はボスフォラス海峡を渡って間もなく壊滅したが、本隊のほうは先遣ピエール隊の弱さに油断したトルコ側に迎撃体制の不備があつて、パレスチナまで進軍できた。しかし、1101 年の大遠征隊は前述の通り、記録から抹消されるほど無残な全滅に終わり、続くフランス王ルイ七世とドイツ王コンラート一世率いる第 2 次十字軍 (1147～49 年) も、小アジアで待ち構えるセルジューク・トルコ軍との戦いで壊滅的な打撃を受けてしまう。このような経験から、第 3 次以降の十字軍は小アジア通過を諦め、海路輸送を主とする方法に切り替えた。このことによってヨーロッパから直接海路パレスチナに到達するルートが開拓され、結果として地中海海運を大きく育てることになるのである。

十字軍の海上輸送：地中海海運の発展 ローマ帝国崩壊後、帝国の内海であった地中海は、サラセン（北アフリカのイスラム教徒を指す）やギリシャの海賊が跋扈する海となって海運は途絶えていた。海賊といってもサラセンの海賊は海上で船を襲うだけでなく、非イスラム教徒の沿岸都市を攻撃し、略奪し、人々を攫って奴隷に売り飛ばすという荒っぽいもので、弱体化していたイタリアの沿岸都市は至るところ被害を受けていた。海賊の中にはイタリアの内陸都市に居座ってそこを拠点に荒らしまわるものすらあった。砂漠の民であるサラセンは、それ以前の北アフリカの住民たちと違って、気長に農産物の成長を待つというこ

とができず、手っ取り早く海賊行為によって生きていこうとしたのであった。しかし、9世紀からキリスト教徒側の巻き返しが始まり、南イタリアのアマルフィがまず海軍を創設してサラセンの海賊と戦い、ついで北イタリアのピサとジェノア、さらに1000年頃にはヴェネチアも参加して、いわゆる四大共和国海運都市が競い合って地中海に交易の賑わいを取り戻していった。

中世の地中海海運の発展の経緯は、塩野七生「ローマ亡き後の地中海世界」(上下)と「海の都の物語」(上下)に詳しく描かれている。前者ではサラセンの海賊対イタリア諸都市の攻防が、後者ではイタリア4都市間の興亡が語られる。その中で「海の都の物語」(上)の第三話『第四次十字軍』と第六話『ライバル、ジェノヴァ』が十字軍のための人と物の輸送について詳しく語っている。アマルフィがローマ帝国滅亡後の初の地中海交易支配者となったのは、北アフリカ一帯のイスラム教徒と良好な関係を保って交易で富を蓄えていたからであった。一時は地中海の商業都市でアマルフィの商人が駐在していない都市はないといわれるほど繁栄したが、アマルフィの黄金期は10世紀の中頃から11世紀中頃までのおよそ100年間で終る。アマルフィ衰退の始まりは、中世最大の海運事業であった十字軍輸送に乗り遅れたためであるが、乗り遅れた理由は、この時期に地中海西部に進駐してきたノルマン人によって本国が征服され、各地に駐在するアマルフィ商人たちの力も次第に衰えていったからであった。

第3次十字軍(1189～1192年)は、ドイツのフリードリヒ1世、フランスのフィリップ2世、イギリスのリチャード1世が勢ぞろいした十字軍であった。ドイツは陸路をとり、小アジアのトルコ軍の壁を突破してキリキア(小アジアの東南部)まで到達しながら、フリードリヒ1世が浅瀬で水死するという不慮の事故によって崩壊した。フランス王とイギリス王は別々に海路を選び、フランス軍は1190年春、イギリス軍は同夏に聖地に到着した。海路輸送はピサとジェノヴァが分担した。ピサとジェノヴァは現有の海運輸送力を挙げて対応したとはいえ、それぞれの国家をゆるがすほどの大事業として取組んだわけではなかった。

ヴェネチア海運と第四次十字軍 第四次十字軍(1202～04年)では、さらに大規模な海路による軍事輸送を試みることとなり、ヴェネチアが本格的に係わることになる。その様子は「海の都の物語」の第3話『第四次十字軍』に生き生きと描かれている。物語は、第4次十字軍が全軍の輸送をすべてヴェネチアに委託すると決め、6人からなるフランスの使節がヴェネチアを訪れて交渉する場面から始まる。フランス側は4,500人の騎士と2万人の歩兵、それに4,500頭の馬と9千人の従士馬丁の輸送を委託する。その上数々の攻城器から兵糧に至るすべての物資を運ぶ契約を結んだ。出港後の1年間、食糧補給を含めて一切の輸送をヴェネチア側が保証するという契約であった。塩野はこの数字を、10年前の第3次十字軍でジェノヴァがフランス軍の輸送を請け負ったときの契約と比較して、いかにヴェネチアの負担が巨大であったかを示している。ジェノヴァによる第3次十字軍の輸送は、騎士650人、従士馬丁1,300人、歩兵はゼロ、馬は1200頭だけであったから桁が違ってい

る。第四次十字軍のヴェネチア出発は 1202 年 6 月 24 日と決められ、十字軍参加者（巡礼者と呼ばれた）は全員がヴェネチアに参集し、ヴェネチア側はその日までに出帆できるよう準備を完了しておくことが約束された。

ヴェネチアは、地中海を航行中の全商船に期日までにヴェネチアに戻るよう指令を出し、造船所をフル回転して新造船（とくに馬を輸送する平底の船を多数作る必要があった）の建造をはじめ、アドリア海の東岸地方の各都市に水夫の大量募集をかけた。結果は、ヴェネチア側は全成人男子の半数が十字軍の遠征に参加するという犠牲まで払って完全に約束を果たしたのに、実際にやってきた十字軍参加者は予定の 3 分の 1 でしかなかった。この契約違反の結末として十字軍側は巨額の賠償金を支払うことになるが、その顛末も、第四次十字軍の予想外の行動（ビザンチン帝国を攻めて陥落させる）も、塩野他の研究書にお任せし、ここでは、地中海の海運がこの後長期にわたってヴェネチアとジェノヴァの支配下におかれ、航海の装備も技術も大きく発展したことを記しておくにとどめよう。

地中海の制海権 フランスもドイツも、ローマ帝国時代に征服されたガリア人と外から侵入してきたゲルマン諸族による内陸国家で海には縁が薄かった。それゆえ、当時まだ海軍を持っていなかったから、地中海の兵員輸送はピサ、ジェノヴァ、ヴェネチアの海軍に依存するしかなかった。イスラムも元来沙漠の民であって、地中海ではエジプト以外に海軍を持っていなかった。サラセンの海賊は正規戦になれば組織的なイタリア軍に叶わず、イタリアの海運都市国家が海運経営に本格的に乗り出すようになってからは、地中海の制海権は東地中海を含めて完全にイタリア都市国家に帰していた。

ジェノヴァもヴェネチアも定期航路を運航するようになり、ムスリムの巡礼の項で述べたとおり、ヨーロッパからのキリスト教の聖地への巡礼も、スペインのムスリムのメッカ巡礼も、イタリア船に乗って往来するのが当然のことになっていた。海運を支配するため、船の規模、乗員の数、海賊への防備、航海術、操船技能、海図の知識など、全てにわたって効率化が図られ、技術が進み、この後地中海から大西洋に出て大航海の時代へと進んでいくのが必至の進行であった。

十字軍派遣以前から、イタリア海運都市は地中海経由イスラム商人を通じて東方との交易を行なっていたが、十字軍の度重なる派遣は必然的に物の生産と商業の発展を大きく刺激した。輸送を請け負ったイタリア諸都市が他に先駆けて豊かになり、先進のビザンチンやイスラムの文化に接して新しい知識・知性・文化を吸収して新しい世界観と価値観を身につけ、ルネサンス文化の花を開かせることになるのである。

5) 中世後期の旅

中世前半における旅といえば、旅の苦難を乗り越えてまで行なわれる布教や巡礼、修道院の商業行為など、宗教がらみの旅がほとんどであった。ローマ帝国時代に発展した「楽しみのための旅」は旅のインフラとともに消えてしまったし、イスラムの世界で盛んであった学者たちの知的探求の旅は、特別の計らいによって例外的に行なわれるだけで、稀で

あった。

しかし、中世後期になると、貨幣経済と都市の発展にともなう、人と物の交流が活発化し、中世前半には途絶え、あるいは細っていた様々な旅が復活してくる。巡礼の旅は活発化するだけでなく、巡礼に名を借りた楽しみのための旅も現れる。とくに 12 世紀以降、商人の旅、遍歴職人の旅や学生たちの放浪の旅、教養・好奇心を満足させる旅も増えてきて、ルネサンスや宗教改革を準備し、社会の近代化が進むにつれて旅もまた大きく発展を遂げて行く。

中世後期の巡礼：巡礼地サンチャゴ・デ・コンポステラ

中世全期を通じ、個人が自発的に遠方に出かける時の目的は巡礼が一番であったし、巡礼ならば旅の名目として社会的に認知されていた。とりわけ十字軍（巡礼でもあった）への庶民の大量参加は偉大な体験であり、時代が下るとともに巡礼は増加の一途を辿った。そして、名目上の目的が巡礼であっても、ひとたび旅に出てしまえば、巡礼目的とは直接関係ない行動も多く、旅には苦労とともに楽しみも多くあった。日本でもお伊勢参りなどの神社仏閣への参拝なら、領地を離れる口実として認められていたのと同じである。

キリスト教の巡礼地は、聖人ゆかりの土地や奇蹟の起こった場所、奪取したり発見されたり捏造されたりした聖遺物をもとに、いたるところに聖地が誕生して巡礼者を集めたが、中世の三大巡礼地はエルサレム、ローマ、サンチャゴ・デ・コンポステラであった。紀元 1000 年頃に宗教的覚醒を果たしたヨーロッパ人は、地元の手近な聖人や聖遺物では満足せず、もっと効験あらたかな、もっと勢威ある聖人を求めて遠路をいとわず故郷を後にし始めたのである。その有様は「頭陀袋を首にかけ、手には巡礼杖をもって祈りながら長距離を踏破する巡礼こそ、中世盛期を特徴づける民間の信仰業の雄であり、遠隔地商人を除けば、定着と固定秩序を是とするキリスト教社会における、例外ともいえるダイナミックな運動であった」（世界の歴史⑩「西ヨーロッパ社会の形成」）。聖地の流行は、十字軍という大遠征事業をまたいで、大まかに言えば、10 世紀にローマ、11 世紀にエルサレム、そして 12 世紀にはサンチャゴ・デ・コンポステラが、順を追って人気の巡礼地として名を高めていった。

1291 年、最後の十字軍国家が陥落してキリスト教勢力がパレスチナから一掃されると、エルサレム詣では困難になり、下火になった。西欧からエルサレムへの巡礼が再興するにはこの後長い時を待たねばならないだろう。この展開で利を得たのはローマであり、サンチャゴ・デ・コンポステラであった。遠隔地への巡礼に目覚めた何百万人という巡礼予備軍が、エルサレムに代えてヨーロッパ内の二大巡礼地に向かったからである。ローマはペテロとパウロ、それに無数の殉教者の眠る聖地であり、歴代教皇もカトリック教会総本山のあるローマに人の流れを呼び込もうと努力するようになっていた。しかし、中世の巡礼旅行を最もよく代表するのは、スペインのサンチャゴ・デ・コンポステラである。

サンチャゴ・デ・コンポステラは、キリスト生誕の地でもなく、教皇が座す教団の中心

地でもない。当時のヨーロッパの人々にとって、スペイン西北端の地の果てのような僻地にゼロから誕生した巡礼地であった。おそらく簡単には行けない目的地であるからこそ、キリストの苦難をいささかでも追体験し得る苦しい道程が、魂の救済や現世のご利益を願うのに有効と思われたからであろう。サンチャゴ・デ・コンポステラは、巡礼に特化した巡礼地として意図的に整備され、時を追ってヨーロッパきっての大巡礼地に変貌していく。

巡礼は非日常であり、危険と隣合わせの旅であったが、いわば当時の国際観光でもあった。「巡礼の文化史」によれば、巡礼の動機は宗教的なものであるのはいうまでもないが、同じ宗教目的でも濃淡があり、年を経るにつれて楽しみの要素が高まっていった。ここでは、そうした変遷をサンチャゴ・デ・コンポステラの誕生と展開を追いながら見ていこう。

サンチャゴ・デ・コンポステラ事始め 中世後期にサンチャゴ・デ・コンポステラはローマに次ぐ大巡礼地となった。交通がきわめて不便な上に、何もない僻地のこの町が聖地として崇められるようになったこと自体が、中世ヨーロッパ人の心象風景を窺わせる。サンチャゴとは12使徒の一人聖ヤコブのことで、紀元44年に12使徒の中で最初に殉教した人とされる。その遺骸が9世紀にコンポステラの地で発見されたことによって巡礼地が誕生するのである。ローマは巡礼対象地であるだけでなく、政治・文化・宗教の中心地であるのに対し、サンチャゴ・デ・コンポステラは巡礼目的地としての誘引力のみによって多くのキリスト教徒をひきつけた。そのために街道を整備し、宿泊施設を整え、巡礼者に対する様々な便宜を図ってきた。

サンチャゴ・デ・コンポステラが別格の巡礼地になった理由は様々に説明されている。エルサレムを世界の中心とするキリスト教の世界図マップ・ムンディでは、コンポステラは西の地の果てに置かれており、関哲行「スペイン巡礼史」の言葉を借りれば、「地の果てとは日没に象徴される宇宙的な生と死の舞台、その死が翌日の黎明とともに蘇生する奇蹟顕現の場所、換言すれば生と死、精神と肉体、天と地が一体化し、宇宙ないし異界へとつながる永遠の救済の地、聖なる中心点であった」。この地は巨石文化時代からケルト人の聖地であって、ローマ帝国時代にキリスト教化され、聖ヤコブの遺骸発見によってヨーロッパ第一の巡礼地となっていく。関の上掲書はその過程を詳細に辿っていて興味深いので関心ある方の一読をお勧めしたい。

聖ヤコブ伝説 サンチャゴ・デ・コンポステラは、聖ヤコブ伝説を創造することによって特別の地となった。「ヤコブの書」やキリスト教の聖人伝説集である「黄金伝説」によれば、使徒ヤコブはスペインに布教に赴き、9人の弟子を得てパレスチナに戻ったことになっている。パレスチナで数々の奇蹟を行なった後、紀元44年ヘロデ王に捕らえられて斬首された。遺体は埋葬地を求めて船に乗せられ、コンポステラ付近の海岸の石の上に置かれると、その石が蟬のように窪んで棺となり、その棺が空中を飛んでコンポステラの地に落ちたのだという。その遺体が9世紀になって「発見」される。時はスペイン北部の狭い地域に押し込められた西ゴート貴族らのキリスト教勢力がレコンキスタ（国土回復運動）を開始した

時期であり、イスラムとの戦いに力を与えるための方策だったのでもあろう。ガリシア地方の隠修士ペラーヨの前に天使が現れ、長い間忘れ去られていたヤコブの墓がある地を指し示した。この発見がアストリアス王アルフォンソ2世(在位 791~842)に伝えられると、王はコンポステラに赴いて聖ヤコブの墓であることを確認し、その上に教会を建立した。これがサンチャゴ・デ・コンポステラの起源である。834年のクラビホの戦(注)では、聖ヤコブ自ら白馬にまたがって天から舞い降り、7万のイスラム軍を撃破してキリスト教側に勝利をもたらしたことになる。

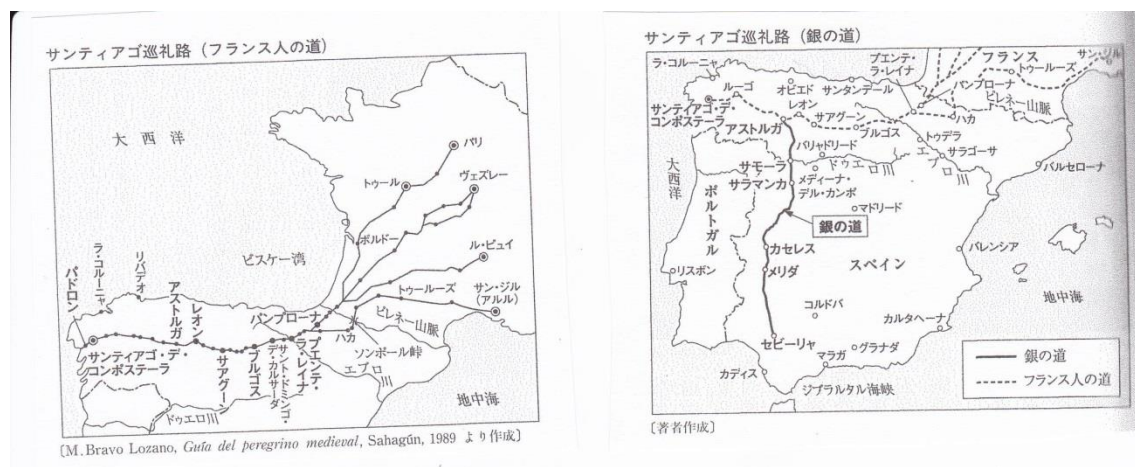
かくて聖ヤコブの物語は、生前伝道の話、遺体の移葬、墓の発見、キリストの戦士、そして、彼が行なったとされる奇蹟の数々が多くのフィクションと潤色を経て「ヤコブの書」に結実した。カール大帝のスペイン遠征、その家臣ローランの英雄物語(ローランの歌)、スペインの失地回復のためのレコンキスタ運動(西方十字軍とも呼ばれる)の英雄物語などと合体し、今のような形にまとまったのであった。

サンチャゴ巡礼案内書 12世紀に聖ヤコブとサンチャゴ・デ・コンポステラに係わる伝説が集大成されて「ヤコブの書」が作られ、その第5巻が「巡礼案内書」に当てられた。これはサンチャゴ・デ・コンポステラへの詳細な旅のガイドブックともいえるべきもので、巡礼者たちはこれを暗記し、あるいは先導者に読んでもらうことによって、長道中の苦労はともかく、誰でも設定された巡礼道を辿っていけば行き着けるようになった。

「巡礼案内書」によれば、北方からサンチャゴへ行く道は、フランスのパリ、ヴェズレー、ルピュイ、サン・ジル(現在のアルル)の四都市を基点に4本の道(フランス人の道と呼ばれる)が整備され、それ以外の地からの巡礼者はこの4都市のいずれかに集まった(図参照)。他方、スペイン中南部からはセヴィリアを起点とする「銀の道」と呼ばれる巡礼道が整備され、半島北部でフランス人の道に合流する。銀の道というのは、ローマ時代スペイン北部で採掘された金や銀をセヴィリアへ運んでいた道で、メリダ、カセレス、サモーラを経由してアストルガで北方からの道につながっていた。その他に海の道もあって、北ヨーロッパからは船で付近のラ・コルーニアに上陸し、あとは陸路を徒歩で行った。イギリス人、フランドル人、ドイツ人で構成された第2次十字軍の一隊は、エルサレムへの途上サンチャゴに参拝している。12世紀は中世におけるサンチャゴ巡礼の最盛期で、年間50万人ほどの巡礼者が訪れたとされている(浅野 p 206)。

関哲行「スペイン巡礼史」によれば、「サンチャゴ巡礼案内書」はヨーロッパで最初に作られた巡礼案内書で、「フランス人の道」の出発地点のひとつ、ヴェズレーから馬で巡礼を実践した司祭エムリー・ピコーの手になるものとされる。目的はサンチャゴ巡礼者に旅費や旅程に関する有用な情報を提供し、巡礼を活性化することにあった。全部で11章に別れ、古代末期のガイドブックと違っているのは、聖人詣でや奇蹟の地といった宗教的要素の説明に大きな比重が置かれているのは当然として、実践のための必要情報をふんだんに掲載している点である。旅の危険や巡礼都市相互間の距離、施療院などの宿泊施設に関する情報、それに各地の景観や食文化、特産物、言語、習俗などを見聞しながら巡礼できるよう

配慮されていた。



巡礼者の多くは日照時間が多くなる春から夏にかけての時期に旅をした。この時期はピレネー山脈を容易に越えられる時期でもあったからである。パリから徒歩で巡礼する場合往復で3～4ヶ月かかっている。当然多額の費用がかかる。関は往復6ヶ月かけたネーデルランドの手工業者が年収の半分ほどで実行した例や、ゲントの下級裁判所執達吏が年収の1.7倍かけた例などをあげている。いずれにしろ旅費の調達は容易ではなかったであろう。

宿舎としての施療院 巡礼行には男女貴賤を問わず誰でも参加したが、貧しい巡礼者たちの多くは無料で質素な施療院や貧民宿を利用した。「スペイン巡礼史」の第6章『巡礼と慈善』によると、巡礼者は心身に疾患を抱えているものが多かったし、健常者でも巡礼途中で病気になったり怪我をする者が続出したから、巡礼街道沿いの都市には巡礼者のために施療院が数多く設けられ、巡礼への便宜が図られていた。施療院の設置主体は、最初は宗教的救済の性格が強かったから修道院や教会であったが、次第に市当局や王権、慈善団体などによる世俗的な救済が増えていった。施療院での巡礼者に対する慈善（救済）は聖書の言説の実践であり、慈善を行なう主体の霊的救済と現世利益に寄与すると考えられたためであるという。

修道院による施療院は小規模なものがほとんどだったが、中核都市には王権や市当局や教会が協力して、大規模な総合施療院が作られるようになっていく。こうした総合施療院は巡礼者のみならず、救済活動の大規模化と効率化による都市型救済の強化を意味し、医療サービスも拡充されて、のちの社会福祉的救済の萌芽とも見られる。なお、中世特有の施療院の実態については、関の上掲書が例を挙げて詳しく説明していることを付記しよう。

巡礼地サンチャゴ・デ・コンポステラの発展 サンチャゴ・デ・コンポステラは、今日では日本でも著名な観光地（巡礼地）として注目されるようになった。「スペイン巡礼史」によってその発展の経緯を見てみると、今風に言えば、地域活性化のために観光客誘致に励んだ結果という気がしないでもない。9世紀の初頭に誰かが聖ヤコブの遺骨が「発見」されたという噂を広めると、アルフォンソ2世がこれを追認し、直ちにその地に聖ヤコブ教会

を建て、教会に隣接する領域を防護施設で囲んで「聖なる空間」とした。教会には小集落が付設され、10世紀には周囲24マイルの土地が教会に寄進された。

それでも10世紀の囲壁内の面積は約3ヘクタール、人口は500人ほどでしかなかった。その後、属域住民がコンポステラの社会・経済的成長を期待して市内に住むようになり、囲壁近くの商人や手工業者の居住区が膨れ上がり、11世紀末にかけて壁が度々拡張された。レコンキスタの進展とも歩調を合わせ、ローカルの巡礼地からヨーロッパ全域対象の国際巡礼地へと成長していく。11世紀末にはパドロンから司教座教会の地位を受け継ぎ、アルフォンソ6世（在位1065～1109）の時代には、聖ヤコブの殉教日を12月から巡礼者が移動しやすい夏場の7月25日へと変更し、1120年にはメリダから大司教座の移転にも成功した。かくして、サンチャゴ・デ・コンポステラ教会は、トレド教会と並ぶスペイン有数の大司教座教会へと昇格した。こうした努力は聖都サンチアゴの発展に大いに貢献したばかりでなく、国際的巡礼地として周辺都市や巡礼街道沿いの都市の発展にも役立った。

俗人のサンチャゴ巡礼報告 「スペイン巡礼史」は俗人のサンチャゴ巡礼についても紹介し、当時のスペイン旅行の雰囲気を与えている。例えば、ボヘミア（現在のチェコ）の有力貴族レオ・デ・ロズミタールは、1465～67年に一行92名の騎馬による巡礼を行った。名物の闘牛の様子を詳しく描いているし、カスティーリア王エンリケ4世臨席の馬上槍試合に飛び入り参加してカスティーリア人騎士を撃破した話などが書かれているという。また、ニュルンベルグの医者で地理学者のヒエロニムス・ミュンツァーと2名のドイツ商人が1494/95年に行なったスペイン旅行では、サンチャゴはメインの目的地ではなく、カタルニア地方のヘローナからスペインに入ったのち、バルセロナ、ヴァレンシアを経由してグラナダに至り、セヴィリア、リスボンなどを経てパドロンからサンチャゴを訪れている。ついであるが、関によれば、このミュンツァーは神聖ローマ皇帝マクシミリアン一世の密使で、コロンブスのアメリカ発見直後のイベリア半島の情報収集とともに、カスティーリアのイザベル1世とアラゴンのフェルナンド2世のカップル王家とハプスブルグ家との婚姻関係の締結の打診を行なったという。結果としてマクシミリアン1世の息子フィリップと両王の娘ファナが結婚し、その子カルロスがスペイン王カルロス1世（のち神聖ローマ皇帝カルロス5世となる）となって、ハプスブルグ家スペインの基盤が作られたのだという。

巡礼から楽しみの旅へ 関哲行は、13世紀まで巡礼動機は現世利益を内包した宗教的動機が優越していたが、それは巡礼に関する資料の大半が教会と修道院の文書だったためでもあるという。それが中世末期から近世にかけて、宗教動機を基本としつつも楽しみや物乞いなどの現世利益が前面に押し出されてくる。宗教的動機は永遠の救済への期待、危難回避や政治・軍事の勝利祈願などが入り混じったものであったりするが、俗人の手になる巡礼資料が増加するにつれて、観光的な要素が強く前面に出てくるという。ノルベルト・オーラー「巡礼の文化史」は、第4章を巡礼の動機の説明にあてて、さらに詳しく巡礼動機を分類している。同書は、関が挙げている現世利益のほかに「模倣と逃走」「冒険心と娯楽

願望」という項目を挙げて解説しているが、これらは関が「観光」としているものに相当する。旅というものは、当初の目的がどうあれ、旅に出た後の過程において様々なことを学び、体験し、成長していくのであり、それらを観光的要素と考えるのが本書の立場でもある。

以下、巡礼に出発する動機を構成する聖人・聖遺物・奇蹟願望について概観しておこう。

巡礼資源と巡礼動機

一神教のキリスト教では神は超絶した存在であり、庶民にはあまりにも畏れ多く、親しみにくい存在であった。キリストの教え自体も、多神教の自在な神々の物語や、謎と恐れに満ちた神話の類にくらべて魅力に乏しかった。福音書はイエスの生立ちや幼時についてさえ説話らしい説話を伝えてくれず、ユダヤ教の救済教義の物語も内容豊かとはいえなかった。キリスト教がユダヤの狭い地域から外に出て、ギリシャ・ローマの神話はもとより、ゲルマンの神話や様々な民間伝承、民族大移動がもたらした多彩な混淆の物語に触れる中で、畏れ多く親しみにくい絶対神の代わりに、イエス・キリストのみならず、もっと身近な 12 使徒や修道僧、殉教者などを聖人に列し、かれらの言行や生涯を伝説化・神話化することで聖なる物語を補ったのであった。

聖人・聖遺物・奇蹟願望と観光 ジェノヴァの司教でもあったヤコブス・デ・ウォラギネが 12 世紀にまとめた聖人物語「黄金伝説」（前田敬作他訳）は、聖書と同等もしくはそれ以上に人々に親しまれ、キリスト教に係わる基礎的な知識を供給した。前田の解説によれば、キリスト教の神話伝説の創作は使徒言行録から始まり、4 世紀初頭のカイサリアの司教エウセビオスの「教会史」10 巻が神話化に大きな役割を果たした。千年以上にわたってアジア、アフリカ、ヨーロッパ 3 大陸にまたがる様々な民間伝承をも吸収して形成され、洗練されていった。「聖人伝説は、ギリシャ・ローマや日本の多神教のような神々をもたないキリスト教の空想力が生み出した神話文学なのであった」（前田敬作）。十二使徒、殉教者、奇蹟を起こした多くの特別の人間が聖人に列せられ、そうした人々の身体の一部や身につけたものなどが聖遺物とされ、信仰の対象となった。そうして生まれた聖遺物をあがめ、触れたり口づけすることによって、その聖性がわが身に及び、ご利益によって病気などが治ると信じられるようになっていったのである。ただし、当然ながら聖人にもランクがある。塩野七生は、ヴェネチアのサン・マルコの由来（アレクサンドリアがムスリムの手落ちたとき、ヴェネチア商館の商人らがサン・マルコの遺骨を豚肉の下に隠して持ち出したという伝説）を語る中で、キリストの 12 使徒、聖パウロ、続いて福音書の著者たちまでが一流であるという。奇蹟を行なった聖人聖女たちはヨーロッパ中の至るところにいて、それぞれが巡礼地となったが、先述のとおり、キリストゆかりの地エルサレムと、聖ペテロと聖パウロが眠るローマ、そして聖ヤコブの遺骨を祭るコンポステラが三大巡礼地になったのであった。

キリスト教は、中世ヨーロッパの人々の精神生活のほとんどすべてであった。彼らの世界は旧・新約聖書、ヤコブの書、黄金伝説などに語られる世界が文化であり、美術であり、

学問の対象であった。教会を飾る彫刻や壁画、ステンドグラスなどには、キリストとともに伝説となった聖人たちの物語が刻まれ、それらが人々の共有する知識であり神話であった。彼らはあちこちの教会や修道院などで学び、説教を聞いて成長したのであった。

浅野和生「中世美術」は、無名の職人たちによって創造された教会堂、内外壁面を飾る彫刻や絵画の魅力を解説してくれる。ルネサンスによってギリシャ・ローマの美術が復活し、その技術が取り入れられるまで、キリスト教美術は生身の肉体を感じさせないものであった。ルネサンス以降、表現の技術も精神も変わったが、美術の題材はそれまで身近にあったキリスト教の聖書か聖人伝説のエピソードばかりで、さらに時代が下るまで、採り上げられるテーマは大きくは変わらなかったのである。

キリスト教の聖年 巡礼目的地の側でも、積極的に巡礼者の受け入れを促進する努力を行なった。「聖年」(ホーリーイヤー、ジュビリー)の設定もその一つである。聖地が聖性の空間的限定概念であるとすれば、聖年は聖性の時間的限定を意味するという。キリスト教の聖年は古代ユダヤ教のヨベル(安息)の年を起源としている。ヨベルの年は50年に一度とされ、この年には奴隷が解放されたり、土地が元の持ち主に返されたりして、経済的格差の是正の機会でもあった。しかし、中世ヨーロッパの聖年はそのような社会的機能は希薄になり、聖地と結びついて聖年に聖地巡礼を行うと現世的利益と来世での救済に格別の効果があるとされた。つまり聖地と聖年とを組み合わせることによって巡礼を促進できると考え、サンチャゴ教会でも、ローマ教会でも、中世末期には聖年を設定して巡礼者を呼び込んだのであった。

関によれば、サンチャゴ教会は1179年にはすでに教皇アレクサンデル3世(在位1159~81)によって聖年布告特権を確認されており、聖ヤコブの殉教日が日曜日に当たる年を聖年と決めることによって、サンチャゴ教会の聖年は6年→5年→11年という周期で回ってくるようになった。関は巡礼地サンチャゴ・デ・コンポステラの発展を現代まで追っているが、現代に至って大いに観光化し、ますます活発化する様はサンチャゴ巡礼の特殊性を伺わせるものである。

他方、ローマでは、教皇ボニファティウス8世(在位1294~1303)が1300年を初めて聖年と定め、この年にローマを訪れた者には全面的な罪の許しを与えるとしたため、同年には全ヨーロッパから20万人もの巡礼者がローマを訪れたという。その後ローマの聖年は50年に一度とされたが、さらに25年に一度となり、多くの人が一生涯に一度はローマで聖年を体験することができるようになった。(ノルベルト・オーラー p14)

聖地巡礼のパッケージツアー

1980年代後半に観光史の資料を集め始めた頃、旅行業の起源に触れた文献のいくつかに、旅行業に類似した最初期の事例として、ヴェネチアのアゴスチノ・コンタリーニという者が、聖地エルサレムへの巡礼旅行の斡旋を行なっていたという記述があった。中世のエルサレム巡礼の斡旋がどのように行なわれていたのか大いに興味をひかれたが、当時の筆者

には調べる手立てがなかった。それが塩野七生の「海の都の物語」の第9話「聖地巡礼パック旅行」を見つけたことで疑問が氷解した。塩野の「聖地巡礼パック旅行」の内容は、サント・ブラスカなる35歳のミラノの高級官僚が半年の休暇をもらい、ヴェネチアを出発港としてパレスチナへの巡礼に出かけた時の日記をもとに、パレスチナへの船旅と聖地巡礼の実際、ヴェネチア当局が聖地巡礼を有力な事業分野と考えて積極的に巡礼客（観光客）誘致策を展開していたことを紹介する物語である。その聖地巡礼の企業家であり、船主であり、添乗員でもあったのがアゴスチノ・コンタリーニであった。

サント・ブラスカの巡礼記 ブラスカはかねて希望していた聖地巡礼を行なうために半年の長期休暇を申請し、留守中の職務を代行してくれる人を定め、万一死ぬことがあった場合の相続人をも指定して、1480年4月29日、友人親族の見送りを受けてヴェネチアに向けてミラノを出発した。途中の町や教会などを見物しながら、5月7日午後3時にヴェネチアに到着する。指定された集合日に合わせてやってきたのだが、実際の船の出発予定は6月6日で、およそ1ヶ月もの間ヴェネチアに滞在して観光してまわることになる。ヴェネチアはローマに次いで聖遺物が多い上に、ローマ以外で唯一都市に免罪符付与権が与えられており、ここで早くも巡礼者は聖遺物の数々を礼拝して沢山の免罪符を得ることができた。のみならず、この時期には次々とキリスト教の例祭が続き、その機会にだけ特別に拝観をゆるされる聖遺物も多かった。それだけでなく、すでにヴェネチアを有名にしていた水の都の著名な水路や建造物はもちろん、ガラス製造工場だの造船工場だの、さらには政府の役所だの、今風に言えば「産業観光」にも次々と招待された。サン・マルコ広場のような街なかで行なわれる聖俗の多様なイベントにも参加させてもらった。その中には宗教とは無縁の大道芸など様々な見世物も展開され、巡礼者たちはここで初めて象を見物するのだった。結果として、1ヶ月の滞在はあっという間に過ぎ、珍しいものの数々を見かつ体験し、大満足して聖地への船旅に出かけていくという構図になっていた。その裏には、巡礼者に長期滞在させ、しっかりお金を落としてもらおうというヴェネチア当局の作戦があったというわけである。

ブラスカ自身はミラノからの客であり、ヴェネチアでは友人宅に宿泊したが、遠方のドイツ、イギリス、フランスなどから来た客は、到着と同時にトロマーリオと呼ばれる巡礼者相手の案内人二人組みに声をかけられる。宿は決まっているのか、もし決まっていなければどれくらい支払えるかを聞いて適当な宿を紹介する。お金もちの巡礼には他国の王や貴族らも利用する超高級ホテルへ、できるだけ安く上げたい巡礼にはほんの少しの喜捨で泊まれる僧院が紹介された。トロマーリオは特定の宿の客引きでもないし、客を案内して金をもらおうというわけでもない。実は来訪外客である巡礼者向けに二人で3ヶ国語を話せるように組み合わせられた市の観光事務所員なのであった。塩野によれば、当時のヴェネチアは観光目的地としても最先端にあり、1355年には旅館組合法が作られ、これには「イギリス女王館」「フランスの盾館」「マルタ十字館」「白獅子館」の4軒の高級ホテルが登録されていたという。トロマーリオに宿泊の面倒を見てもらった客は、意外にも翌朝その中

のひとり（言語によってきまる）の訪問を受け、巡礼行に必要な品々の買いまわりに付き合ってくれるという。長途の船旅や現地の砂漠の旅に何を持参すべきかわからない巡礼者にとって、いたれりつくせりのサービスである。このサービスは高級ホテルに泊まる客でも、僧院に泊まる客でも同じ扱いであった。

巡礼の旅程 ヴェネチアの観光事業については後でもう一度触れるとして、まずは塩野の記述に沿って聖地巡礼の実際を追ってみよう。大型ガレー船の巡礼専用船コンタリーナ号（コンタリーノの船）は、この年はトルコとの戦争のため1回しか運航されないことになっており、同乗する巡礼者は90名であった。相客の中にはジュネーブの司教、レマン湖の司教、4人のイギリス貴族のような高位の人たちも加わっていた。6月6日に出港し、アドリア海を抜けてイオニア海に入る。その間の停泊地では、僧院や街中や大聖堂などを訪ねている。風や波の具合で進行は遅いが、なんとなく国際クルーズ船の趣である。トルコの海軍と出くわしたり、作業中に帆が落ちで船員が一人死んで水葬に付されたりと、あれこれ臨場感溢れる出来事が起こるが、まずは順調に航海をつづけ、ヴェネチア出港1ヵ月後の7月4日にペロポネソス半島の南端にあるヴェネチアの基地に到着した。次の上陸地は1204年以来ヴェネチア領になっているクレタ島の首都カンディア。ここで5日ほど過ごし、7月14日にパレスチナへの最後の行程に出発する。通常巡礼船は聖ヨハネ騎士団が領有するロードス島に寄港するのだが、このときは異教徒国トルコの攻撃に曝されているために立ち寄れないのを残念に思いつつ行き過ぎ、キプロス島へ寄港する。ここもトルコ海軍に襲撃されたものの幸い撃退したあとだったので寄港できたが、町は大きく破壊されていた。

聖地巡礼のスタート地ヤッファ（現在のテルアビブ）には、7月20日ヴェネチア出港後1ヶ月半で到着した。港には大勢のアラブ人が小舟を駆って物を売りに来て、船長がこの地方にしかない果物などの説明をしてくれた。イスラムの支配地だから入国手続きが必要で、許可証が届くのに3日ほどかかった。その前に到着していた何10頭ものラクダやロバにそれぞれ分乗し、キリスト教徒でガゼツラと呼ばれる巡礼専門の通訳兼ガイドに率いられ、キリスト教の僧院、聖跡や聖遺物の訪問に出発する。聖地での個々の聖跡訪問による免罪符は、完全免罪か、7年と40日のどちらかと決められており、訪れるたびに免罪が積みあがっていく。

7月28日にエルサレムの城外に到着。アラブ人たちのバザールは、見るのも歩くのも実に楽しいと書いている。食料を売っている場所はお祭りのときのミラノの市場のようだ、などとバザールの模様を描写し、アラブ人の服装や風俗なども紹介する。例えば「女たちは、白の布地で頭から足の先までおおっている。まるで四角の箱型の布を、首と腰のところをしばっただけという感じ。顔は黒いヴェールで完全におおわれていて、眼の場所さえわからない」といった具合の描写が続く。読んでみると、今日の海外旅行とさして違わない印象さえあり、彼らが大いに楽しんでいることが窺える。

同じ船で来て同じ船で帰る巡礼者の聖地滞在は20日間の予定である。その間の行動は現代のパッケージツアーと同じで、ガイド兼通訳の案内で聖跡を参拝し、夜には指定の宿舎

に戻る。参拝は通常午前中から昼食までであり、昼食後から夕方までは原則自由行動である。エルサレムでの滞在が終ると、次はキリスト誕生の地ベツレヘム、さらにジェリコなどヨルダン川地域への訪問である。ガイドに案内されて次々に聖跡や聖遺物を訪れ、聖書に登場する人物の事跡や逸話が語られる。ブラスカの感想もその語り口も、海外旅行で史跡名勝を巡っている近代の観光客とほとんど変わらない。

8月10日、聖地巡礼を終えて港町ヤッファに戻り、翌日には出港して帰途につく。途中キプロスに立ち寄って見物する。往路で立ち寄れなかったロードス島もトルコ軍が侵略を諦めて出て行ったということで、上陸して見物できた。クレタには3日間停泊、ヴェネチアに帰着したのは10月22日であった。ブラスカはヴェネチアで3日間眠り続けて元気を回復し、観光には飽き飽きしているはずなのに、さらにミラノへの帰途パドヴァ、ヴィチェンツァ、ヴェローナをゆっくり見物して、故郷ミラノには11月5日に戻っている。行きの船旅が45日、ヤッファに上陸して聖地を回り帰途につくまでが22日、帰りの船旅が72日で、合計139日間という長い旅であった。それでも、ブラスカは近隣のミラノからだからこの程度で済むが、フランスやドイツからやってくる巡礼の場合、ヴェネチアまでの往復が加わるから、さらに2ヶ月ほど多くかかったであろう。

ちなみにツアーの料金は、ヴェネチアからヤッファまでの往復の船賃（食費や出国・入国税などを含む）が1等客室で35～40デュカート、安いクラスで25デュカート、最低は15デュカートまでであった。パレスチナに上陸したあと異教徒に支払う聖地参拝のための交通費や参拝費が15デュカート（これは値切るわけには行かない）、さらに聖地での20日間の宿泊食事などの自己負担の経費が20デュカートほどかかるから、現地の滞在費が最低でも40～60デュカートはかかる。その上に、ヴェネチアまでの往復旅費とヴェネチアでの滞在費を加えれば巨額の出費になる。ちなみに、デュカートというのはヴェネチアが1284年から発行していた金貨で、当時の価値で庶民階級が家賃を計算外として15～20デュカートで1年生活できたというから、もし庶民が出かけようとするれば、5～6年分の家計生活費をつぎ込む覚悟が必要であった。やはりこうしたパッケージ客は、特別に恵まれた層だけが対象だったのであろう。

ヴェネチアの観光事業 本項の冒頭で、ヴェネチアに到着したばかりの巡礼予定者に市の観光事務所員トロマーリオが接近して案内を行なう様を紹介した。聖地巡礼を安全かつ安心できる旅として運行するためにヴェネチア共和国は国ぐるみで取組み、観光から利益を上げる目的でハード、ソフトのインフラ整備を行なっていた。当時、聖地パレスチナへの巡礼は、長い船旅の危険や異教徒に妨害される危惧もあったが、西欧のキリスト教徒にとっての夢であり続けていた。ヴェネチアは地中海第一の海運国であり、船の護衛体制も確立していた（巡礼船には軍の護衛も乗り組んでいた）。2隻の巡礼専用船を持ち、毎年聖体祭（復活祭の60日後の木曜日）を終えてから出港することに決まっていた。ほかに、巡礼専用船によらず、商船に便乗して独自に出かけることもできた。安全にはとくに注意が払われたが、それでも事故はよく起こった。ブラスカが乗った1480年の巡礼船では、往路は無事だった

が、帰路に立ち寄ったキプロスで熱病にやられ、5人の巡礼が亡くなっている（ほかに船員が2名事故で死亡）。

亡くなった巡礼の遺体の始末はどのように行なわれたのか。ヴェネチアの聖地巡礼事業については「巡礼事業法」という特別の法律が定められていた。この法律によって乗船する巡礼者の数を制限し、船内での食事の質に眼を光らせ、旅の途中で巡礼者が亡くなるような事態が生じたときには、状況に応じた丁重な遺体の処置はもちろん、死者の所持品は遺族に送り返されることが決められていた。亡くなった日によって、残りの日数に応じた旅費の返還が船長の義務とされていた。フランス船にはこのような法規制がなく、旅行中に死者が出ればその所持品は船長のものになるのが普通で、旅行費の返還など論外であったという。観光事業はソフトのノウハウこそ重要である。マルセイユ発の方がイギリスやフランスからの巡礼者にとってははるかに便利であったのに、ヴェネチアが200年間にわたって中世最大の観光事業の王座を維持し得た裏には、こうしたヴェネチア政府の方針があったのである。

聖地巡礼を請負うコンタリーニ船長は、今風に言えばツアーオペレーターとしてこの時点ですでに16年の経験を有し、聖地の旅行事情を熟知していた。必要な証明書や通行書などは巡礼者に代わって手配し、巡礼客は何もする必要がなかった。また、このツアーにはオプションもあり、エルサレムで一行と別れてシナイ半島を訪問し、アレクサンドリアで乗船して帰途につくコースもあった。ブラスカが乗った巡礼船からもイギリス人2名がこのコースを選んでいく。

世界初のインバウンド国際観光事業 以上は今風に言えば、ヴェネチア発聖地へのアウトバウンド旅行の催行であるが、ヴェネチアの凄かったところは、冒頭紹介したように、巡礼者をヴェネチアに1ヶ月ほど滞在させ、免罪符の獲得といった「実利」だけでなく、宗教的雰囲気にとらわれずに、俗界の楽しみをふんだんに取り入れて退屈させなかったことである。状況を考えれば、観光のソフト面の充実がヴェネチア共和国の真骨頂であった。その最たるものが冒頭で紹介したトロマーリオである。ホテルの事前予約制度などあるはずもなく、遠方から到着する巡礼者が真っ先に悩むのがヴェネチアでの宿泊であった。トロマーリオはこれを遅滞なく確保したあと、個々の巡礼を支援して買物に案内する。ヴェネチアには聖地巡礼に持参すべき品目が全部揃っており、ここで買っていないと困るのである。例えば船上でも砂漠でも夜は冷えるから、身体全体を覆える長く大きくて暖かい毛織のマントが必需品であり、それに、清潔好きにはシャツを沢山買うように進言する。シーツ、手ぬぐい、ナプキン、エトセトラ。それに初めての巡礼者には思いもつかない沢山引き出しのついた小タンスとか、船上の長旅に必要な敷布団などである。敷布団は中古品も揃っており、帰着後はヴェネチアで再販売できるが、小タンスの方は便利でもあり記念品として持ち帰る者が多く、中古はなかったという。食料品の買い込みも重要であった。旅は食費込みとはいえ個人の好みもあるし、長旅に口を慰めるものが欲しい。保存が利くハムやサラミ、塩漬け肉、チーズ各種、それに堅焼きのビスケットなどが揃っていた。ワ

インもあるし、船酔い用の果物入りシロップ、などなどである。これらを販売して巡礼者の便宜を図ることによって、ヴェネチアの商業もうるおうわけである。買った商品は出港まで預かっておいてもらい、出港前日に船積みされることになっていた。

以上、塩野の「聖地巡礼のバック旅行」によって長々と紹介したが、これは観光地の施策と観光させる側の公的な行動が明らかにされた世界最初の事例であろう。このような観光地の政府による外客への便宜供与事業は、近代以降では珍しくないが、中世という時代に行なわれたヴェネチア政府の施策は興味深く、本書には欠かかせない事例の一つである。

旅行記の出版：日記と自伝 サント・ブラスカの「聖地巡礼記」はミラノに帰着後わずか3ヵ月後の1481年2月に初版本が出版されている。そして第2版が1497年、第3版が1519年に出版されているから、よく売れ、よく読まれたことを示している。グーテンベルクの活版印刷機の発明（1445年頃）以来、印刷は急速に広まり、ヴェネチアではすでに印刷による出版が行なわれていた。塩野によれば、このような聖地巡礼記を書いたのはブラスカだけではなく、1458年から1498年の間だけで、イギリス人3人、フランス人4人、ドイツ人7人、イタリア人11人がそれぞれの見方で巡礼旅行記を残しているという。塩野の聖地巡礼の物語も、サント・ブラスカの日記を基本としているが、ほかの何人かの巡礼旅行記からも採取して構成したと断っている。個人が出版を目的に旅行記を書き記すこと自体が、すでにルネサンス期の個性の追求と自由な表現の息吹を感じさせるものである。写真のない時代であったから、簡単なデッサンが添えられるのが普通であった。ブラスカのは幼稚な素描でしかなかったが、二人のドイツ貴族が別々の時期に聖地を訪れた際に残した挿絵入りの旅行記は圧巻だと書いている。彼らの場合は、絵師や専門家をお供として連れて行って描かせたもので、彼らの描いた絵によって、15世紀末期の聖地巡礼の様子や途中の訪問地、コンタリーナ号の様子などが生き生きと表現されている。

この点については、ノルベルト・オーラーの「中世の旅」も、1483年から84年にかけてマインツ聖堂参事会員ベルンハルト・フォン・ブライデンバッハが残したヴェネチア発のパレスチナ、アレクサンドリアを回る聖地ツアーに参加した旅行記を紹介している。ブライデンバッハは、画家と通訳とともに記録者としてドイツ貴族のお供をして出かけ、帰国後詳細な絵入り旅行記を出版したのだが（当の貴族はアレクサンドリアで赤痢にかかって死亡）、こちらは塩野のヴェネチア賛歌とも言える好意的な描き方と違って、ヴェネチアの船主との交渉には注意しないと騙されると警告したり、第四次十字軍で参加者たちがひどい目にあった話などを引き合いに出してヴェネチア批判もしていることを付け加えておこう。ただし、聖地巡礼などについての記述はブランカとほぼ同じであり、聖地巡礼のバックツアーが機能していたことを裏付けている。（ノルベルト・オーラー「中世の旅」p418）

ちなみに、塩野によれば、ブラスカが聖地巡礼に出かけた1480年といえば、ルネサンス文化がフィレンツェを中心に花開きつつあった時期で、ロレンツォ・デ・メディチが31歳、ボッチェリ35歳、レオナルド・ダ・ヴィンチ28歳、ミケランジェロ5歳、マキャベリ11歳、ラファエロはマイナス3歳であった。

カンタベリー物語

もうひとつ、巡礼との関連で観光の世界史に欠かせないのが、英国の作家ジョフリー・チョーサー（1340～1400）の「カンタベリー物語」である。ただし、「カンタベリー物語」は巡礼行そのものを描こうとしているのではなく、カンタベリーへ馬で巡礼に出かけようとロンドン南郊のタバード（陣羽織）亭なる旅籠に集まった人々の物語である。当時のイギリスの階級・職業を網羅する 29 人が、片道およそ 3 泊 4 日の巡礼の旅のつれづれを慰めるために、それぞれが自由に面白いと思う話（内容は巡礼とは無関係）をするという趣向のものである。イギリスのキリスト教会の首座であるカンタベリー大司教聖トマス・ア・ベケットが国王と対立し、1170 年国王の刺客に刺殺されて殉教した。聖トマスは死後 3 年という異例の早さで聖人に列せられ、以来聖トマスのカンタベリー大聖堂はイギリスきっての巡礼地となっていたのである。

「カンタベリー物語」（1387/8）が観光史から見てもユニークな位置を占めるのは、第一に「カンタベリー物語」はフィクションであり、ジョフリー・チョーサーという作家の目を通して、巡礼旅行を材料に、当時の世相を巧みに描出している点である。日記による具体的事例の描出ではなく、チョーサーの目を通すことで巡礼行動が社会化されている。社本時子の「インの文化史」によれば、当時のイギリスでは、グラストンベリーやセントオールバンズやカンタベリーへの巡礼は「庶民の春の大行事」であったというから、チョーサーの関心は巡礼の旅そのものにはなかった。むしろ、巡礼が宗教的情熱に溢れているわけではなく、いろんな階層や職業の旅の道連れとの出会いの面白さや、非日常の旅を楽しむ観光的要素の強い巡礼の様子を意図して浮き彫りにしているのである。この点について、オーラーの「巡礼の文化史」は、『巡礼者から教養と娯楽の旅人へ』という項の中で、『カンタベリー物語』や他の文献を見ると、中世末期には巡礼詣でが娯楽の旅へとスムーズに移行したことが明らかになる」と書き、「カンタベリー物語」をその先駆的表現と見ている。また、エリック・リードの「旅の思想史」は、トマス・モア（1478～1535）の「偶像崇拜をめぐる対話」にある《巡礼者の大半は信心のために来るのではなく、気の合う仲間を見つけて道中おしゃべりをし、着いたら酔うまで酒を飲み、千鳥足でダンスをしながら帰るために出かけるのです》という言葉を紹介した上で、『カンタベリー物語』の中で巡礼者たちが巡礼を口実に休暇をとり、集まって浮かれ騒ぐとき、それは巡礼に元来備わっている性格を冒涇しているのではなく、たたえているのである」と言っている。遊びに出かけるといえば制約がある時代に、巡礼といえば許される状況は、お伊勢参りを口実に面白おかしく旅をする「東海道中膝栗毛」にも通じるものがありそうである。

第二は、彼らが出会うタバード亭が当時ロンドン南郊のサザークに実在した^{イン}旅籠であり、イギリスでインというものの記述が登場する最初期のものだという点である。この旅籠はタバード（陣羽織）という名前で、時代も規模も違うが、あたかも江戸の品川のように妓楼などが立ち並びいささか猥雑な界限にあり、宿屋が何軒も並んでいたようである。「カン

「カンタベリー物語」では、冒頭に巡礼者たちが相談する場面で「この宿屋は部屋も厩も広く、われわれは最上のもてなしをうけた」と書かれている以上の説明はないが、この宿についてはその後も文献に時折登場し、臼田昭「イン：イギリスの宿屋の話」によると、チョーサーゆかりのこの宿屋は、何度か改築されて 1875 年まで残っていたという。いずれにしてもイギリス観光史の最初期を飾る記述である。

第三の特徴は語られる内容である。未完のものを含め 24 の物語を収録しているが、内容は当時の人々の生活を反映して千差万別である。まず、冒頭の騎士の物語では、登場する騎士が聖地への十字軍にも参加し、他の様々な機会に騎士として参戦するなどヨーロッパ中を旅した経験がある人だと紹介される。そしてこの騎士が仲間に語って聞かせる物語とは、中世には異教として禁止されていて一般の人は知らないはずのギリシャ・ローマ神話を題材にし、美の女神ヴィーナスや軍神マルス、アテナイの英雄テセウスやテーバイの王カドモスなどを登場させている。騎士の語る話は、そうしたギリシャ神話物語にはめ込んだ「中世騎士物語」なのである。このような物語を語らせるのが可能だったのは、チョーサーが何度かルネサンス進行中のイタリアを訪れて、ダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョなど同時代の作家の作品に親しむとともに、イタリアの都市国家の自由な空気をたっぷり吸ってきているからであった。

「カンタベリー物語」は、イタリアのというよりヨーロッパ最初の小説といわれるボッカッチョ（1313～75）の「デカメロン」の影響をうけて作られたといわれ、騎士の物語もボッカッチョのテセウスの物語を借りたものである。厳しい思想統制を行なったカトリック教会の支配体制に対して、聖からも俗からも反旗がひるがえされる時代になって、革新の動きがひとたび活発化すると、あっという間に全ヨーロッパに波及して行ったことが窺われる事例でもある。イギリスがカトリック教会の直接的支配を受けにくい位置にあったことが影響しているかもしれない。また、騎士の物語のような高度な知識を披露する話があると思えば、尼僧院長とか弁護士などの職種に見合った話もあり、他方、粉屋の話、家扶の話、バースの女房の話など、庶民の露骨で猥雑な話が結構多い。しかも、当時では他に例がない本人が一人称で話をするという形をとっている。こんな話を宮廷に勤める身分のチョーサーが公けにしてよいのかと疑問を感じるほどのものもある。チョーサーが生きた時代は、佐藤彰一・池上俊一「ヨーロッパ世界の形成」の言葉を借りれば、「世俗国家が教会を上回る権威を帯びて台頭したが、俗語であるフランス語、英語、ドイツ語が、国民・民族の言葉として、かつての規範語であるラテン語にとってかわるという言語上の出来事をともなっていた」時代のはしりであり、「カンタベリー物語」はイタリア・ルネサンスの息吹を直接イギリスに持ち込んだ作品なのであった。

以上、名目は巡礼でも、次第に旅を楽しむ傾向が顕著になっていく様を紹介した。中世後期には巡礼の旅以外にも、経済の発展と社会の安定のゆえに、職人・芸術家、遍歴職人、遍歴学生、人を楽しませることを職とする旅芸人のような人々も道路に現れるようになる。ただし、こういう人々が頻繁に旅したことは文献から想像はできるが、旅自体の記録はあ

まり残されていない。中世後期の旅については、1) ノルベルト・オーラー「中世の旅」のほかに、2) 阿部謹也著作集⑤「中世を旅する人々」、3) ヨーロッパ中世シリーズ④「旅する人々」(関哲行)などが、新しい形態の旅を紹介しているので、これらを参照して以下簡単に紹介する。

商業の旅

西ローマ帝国滅亡後 6 世紀までは、西ヨーロッパの遠隔地商業については、シリア人やユダヤ人など東地中海出身の商人の活躍が記録に残されている。彼らは東地中海の物産であるオリーブ油やパピルス紙のほか、さらに遠方の香辛料や絹織物などをもたらしていたが、7 世紀の中頃に突然姿を消してしまう。アンリ・ピレンヌはイスラム勢力が地中海を支配した結果であろうと推論しているが、イスラムは政治活動と商業活動を切り離して考えていたから、地中海貿易の途絶をもたらすはずはないという反論もあって定かではない。彼らが消えた後の域内商業は、免税特権その他の公的権力と結びついた修道院商人と宮廷商人が流通を担ってきた(「西ヨーロッパ世界の形成」)。

11 世紀に入るとイタリア諸都市が地中海の制海権を握り、東方貿易を活発に行なったことは十字軍の項で述べた。他方、北部ヨーロッパでは、フランドル地方の毛織物、北海・バルト海のタラやニシン、東ドイツの小麦とビール、スカンジナビアの木材、銅、鉄、バルト海の琥珀、イギリスの羊毛、その他必需品の数々がフランドルやハンザ諸都市の商人によって取引され、大きな利益を上げるようになった。こうした交易の一大中心地がシャンパーニュ^{おおいち}大都市であった。この時期の商業の形態を、関哲行は「遍歴商人」と表現している。遍歴商人とは、他の商人とともに隊商を組織し、各地を移動しながら、目的の市場(年市や週市などの定期市)や都市、宮廷にまで商品を運び、そこで販売する商人を指す。帰りにはその代金で商品を購入し、出発地点まで運搬するのが常であった。商品や貨幣を持参する旅は危険だから、商人も武装し、隊商を組んで自営したのみならず、各地の封建領主と金銭支払による安全護送契約を結んで、自分たちの身体や商品の安全を図っていたという。このような遍歴商人の時代を代表するのがシャンパーニュ大都市だったのである。

シャンパーニュ大都市 シャンパーニュ地方はフランス中央部に広がる平原地帯であるが、マース、モーゼル、セーヌの各大河に囲まれ、これらの支流をも辿れば、南へはソーヌ河からローヌ川に入ってプロヴァンス地方経由地中海につながるし、西はロアール川に沿ってフランス中央部を抜けて大西洋へ、または、セーヌ川を下ってパリからノルマンディー経由英仏海峡へ抜けられる。東北方面はマース川を下ってフランドル地方から北海へ、北海からはライン川その他を経由してドイツ各地ともつながっている。多少の陸路も使えばアルプスを越えて北イタリアへも出ることができる。要するにシャンパーニュ地方は、水運による大量輸送が可能という地の利のうえに、地中海貿易と北方のフランドルやハンザ商業都市との中間地点にあって、中継交易の最適地として選ばれたのであった。

もともとはローカルな定期市であったが、12 世紀半ばには国際的大市となり、この地方

のラニイとバル・シュル・オーブで年 1 回、プロヴァンとトロアで年 2 回開催され、交易商品が集められた。それぞれ開催期間は 6～7 週間であったから、7、8 月の夏場を除いて、実質的にはほぼ常設に近い市が開催されていた。大市にはヴェネチア、ジェノヴァを中心とする地中海商業圏とハンザ同盟が中核の北欧商業圏から多数の商人が参加し、地元や近隣諸国・地域の商人が集って賑やかであった。

遍歴商人の旅の記録 この時期の商人が残した記録はほとんどないようだが、関は 12 世紀に遍歴商人として活動し、のち聖人に列せられた聖ゴドリックと、15 世紀のステーブル商人（イギリスの羊毛取引制度の権利を受けた商人）トマス・ベトソンを例に挙げている。聖ゴドリックは 11 世紀末に貧農の家に生まれ、商業に惹かれて近隣の都市や村落を巡る遍歴商人となり、やがて仲間と隊商を組み、船に乗り組んでデンマークやフランドル地方との遠隔商業に携わった。何度も海賊に襲われ、仲間の裏切りにもあったが、短期間に巨額の財産を築いたあと、30 歳くらいで商業の世界から身を引いた。ローマやエルサレムへの巡礼行をしたあと、全財産を貧民に施し、敬虔な隠修士として過ごして聖人に列せられ、12 世紀後半の聖人伝に記載されて記録に残った人である。ベトソンのほうは主にグロスターシャーで羊毛を買い付け、ロンドンで船積みし、海賊から守るために船団を組織して英仏海峡を往来した。当時ステーブル制度の集荷地がカレーだったので、ここでフランドル商人やイタリア商人と取引したのみならず、ブリュージュやアントワープの定期市にも出向いて外国商人と取引を行なった。

シャンパーニュ大市は、レコンキスタ運動の南下によってジブラルタル海峡がイスラム勢力から開放されると（1248 年）、北イタリア諸都市とフランドルとの直接取引が可能になり、内陸交通によるシャンパーニュ大市は衰亡して行った。

ボッカッチョの商人の旅 ノーラーは、中世の商人の旅についてもところどころで言及しているが、個別の項目は設けず、商人の個別の事例は挙げていない。その代わりにボッカッチョの「デカメロン」の一話によって商人の旅を紹介している。事例ではなく、創作作品として描かれた商人の旅であるが、当時の人々の常識を踏まえたこの時代の商人の旅とっていいであろう。デカメロンは 1350 年頃の作品である。ボッカッチョは同時代人の生活の種々相を描いているが、商人たちの危険にみちた生活についても様々な角度から光を当てている。手ひどく騙される者、難破する者、海賊に囚われて奴隷に売られる者、全財産をなくして海賊に転向してひと財産稼いでから再びまっとうな生活をおくる者など、商人への関心の高さをうかがわせる。ボッカッチョは少年時にフィレンツェで商業見習をしたあと、14～18 歳まで当時最大の国際都市のひとつだったナポリのバルディ商会で本格的に金融業や商業の実務見習いをした。この国際港湾都市にやってくる商人を含む多くの人々と接触しながら、著作者としての知識や腕を磨いていたから、商人の旅についても知識は豊富だったと思われる。デカメロン第 2 日の第 2 話「商人の話」とは次のような内容である。

商人リナルドは、トリノから東へ 50 km ほど北の町アスティに住む商人である。アスティから 250 km ほど離れた中部の町ボローニャ市での商売を終えて帰途につく。召使一人だけを連れての旅であり、廻り道をしてフェラーラからヴェローナ方面に馬にゆられて行く。今日はどこでどんな夜を迎えるのか不安でもあり、楽しみでもある。途中で商人風の男の三人連れに会い、進んで道連れになる。ボッカチョはそれがまず軽率だと言う。気晴らしの必要や安全のために道連れになるなら賢明であるべきで、余計なおしゃべりはすべきでない。それは巡礼でも商人でも、遍歴の学生でも同じである。リナルドは、自分は信仰が薄い方だが、旅に出ればよい宿にめぐり合えるように旅の守護聖人である聖ジュリアーノへのお祈りだけは欠かさないと話し、いろいろ危険な目にあったが、その都度聖人のお助けで危機を脱し、いつもしかるべき適当なところに泊めてもらうことができた、などとおしゃべりする。三人組は会話からリナルドが商人と知り、さびしい場所にさしかかったところでシャツ一枚を残して身ぐるみはいで置去りにする。召使のほうは一目散に逃げ出して近くの町へ行ってしまった。旅の守護聖人への信頼がゆらぎ、寒さに震えながら町までたどり着くがすでに城門は閉まり、跳ね橋は上げられていた。仕方なく一部城門からはみ出して建てられている家の軒下で降る雪を避けてうずくまっていた。

ところが、その家の女主人が、来てくれるはずだった愛人から来られないとの連絡があってご機嫌ナナメなところにリナルドの泣き声を耳にして、一夜の宿を貸し、たつぷりと愛を交わし、翌朝はお金までくれてそっと出してくれた。町で召使も見つかって服を着替えることができ、さらに、泥棒どもが別の罪で引っ張られているところに行き会って、盗まれたものも取り戻し、泥棒のほうは絞首刑に処される。で、リナルドは旅の守護聖人にあらためて感謝するというハッピーエンドの物語である。言ってみれば、一人旅は危険であり、人を簡単に信用してはいけないが、旅には幸運もつきもので、楽しいこともあるということであろうか。

建築職人と芸術家の旅

オーラーによれば、中世の職人と芸術家ははっきりとは区別しにくい、いずれにしても自分たちの旅の記録をほとんど残していないし、彼らの遍歴やそれを窺わせる公的な記録もないという。例えば、聖俗の巨大建造物が計画されれば、設計家から石工、大工、装飾芸術家、ガラス絵描きその他の専門職人群が集められる。こうした職人・芸術家たちは、古代から自発的であれ強制的であれ、普通の人びとより活発に動き回ったことが知られている。

中世後期には、大聖堂・修道院・教会堂、城砦・王宮・邸宅、その他の大型石造建築がヨーロッパ中で作られはじめ、腕のいい石工職や装飾職人は求められてあちこちに出かけていったと考えられている。10 世紀末頃に始まり、11 世紀から 12 世紀にかけて大きく発展したロマネスク様式の教会堂建築や、12 世紀半ばに始まるゴシック建築などの建設のためには大勢の職人が必要であった。木造だった城砦も石造りの堅固なものになっていく。建築主の資金が途絶えれば、途中でも別の現場を探して旅に出なくてはならなかった。お

興入れをする宮廷の姫君のお供をしたのは聖職者や騎士だけでなく、職人や建築家も加えられることが多かったという。これらの旅する職人たちの中には、好奇心とはるかな土地への憧れを動機にしていた者もあり、オーラーは、旅の途中で目についた変わった建築のことを記録したピカルディーの棟梁ヴィラル・ド・オヌクールを紹介している。彼は1230年頃、当時の有名な大聖堂を研究し、それらのディテールを書き残し、さらに研鑽を積もうとハンガリーにまで足跡を残している。

十字軍の遠征で、西欧人は突如ビザンチンやイスラムの芸術と邂逅した。聖王ルイは建築家を伴って聖地に赴いているし、裕福な人は十字軍や巡礼の旅から写本、美術品、新しい着想をもたらし、彼らの地元の芸術家を刺激した。尖頭アーチや十字格縁、束ね柱はゴシック建築に取り入れられる前からアルメニアのキリスト教建築やイスラムの建造物に存在していたし、シチリア島に居住した神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世（在位 1212～50）は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教の文化圏から芸術家や学者を宮廷に集めていた。言い換えれば、南イタリアとシチリア島がシュタウヘン朝神聖ローマ帝国に併合されたことと、第四次十字軍がビザンチンを征服した（1204年）ことによって、ビザンチンやイスラムの建築術や芸術がヨーロッパの芸術家に大きな影響を与えたのである。諸侯や修道院も新しい建築や美術に関心を払う余裕ができ、職人・芸術家たちはイングランドからケルンへ、フィレンツェからブリュージュへとヨーロッパ内を縦横に往来したのであった。

遍歴職人の旅 遍歴職人とは、中世に始まったツンフト制度（手工業のギルド）のもとで、若いうちに職人が他所に職を求めて腕を磨くために旅に出ることを指し、中世の旅に関わる上記の3文献とも、遍歴職人の歴史的背景や実態に多くのページを割いている。遍歴職人はドイツを中心にフランドルやフランスでも見られるが、とくにドイツではギルドの親方になるために遍歴修業を義務づけるなど、厳しい制度を維持した。若く未経験な職人が未知の国にひとりで旅立ち、他人の間に混じって働くという経験は何にも換えられない大きな教育の手段であったから、職人遍歴は後世のロマン主義時代に美化され、「遍歴こそ職人の大学」とすら言われ、「美しき水車小屋の娘」のように歌にも歌われたが、中世における職人遍歴の実態は大変厳しいものであったという。全体的にものをつくる職人よりそれを売買して稼ぐ商人のほうが豊かで、フランドルやハンザ都市やイタリアの商人には豊かな者が多かったが、手工業の職人は概して貧しく厳しい環境に置かれていた。

関哲行「中世：旅する人びと」は、「遍歴職人の旅」という項目を設け、サンチャゴ巡礼路の諸都市に屹立するロマネスク様式の教会や修道院建築に携わった石工たちの例を挙げている。フランスの石工たちは、ロッジと呼ばれる各地の宿泊施設を転々としながら、ロマネスク教会をフランスの巡礼路諸都市に建築していったが、作業する際自分の名前の頭文字と、矢印・渦巻き・円などを組み合わせた自身のアトリビュート・マークを切石の表面に刻むのが慣例であったため、同じ石工が300 km離れた場所で別の教会堂の建設作業に従事していたことが分かるという。一般に石工の仕事は一時に大勢が必要だが、建設が終われば仕事なくなり、多くは新しい仕事を求めて別の都市に行かざるを得ない。装飾技術

の職人、鐘を造る鋳物職人なども同様で、一時的な仕事が終れば移動するのが常であった。しかし、職人の数が増え建築ブームが去ると、親方になる道も狭まり、義務的に遍歴の旅に出ることが職不足の解決策として行なわれるようになっていった。

また、阿部の「中世を旅する人々」の主題のひとつは、ドイツの中世後期に始まったツンフト制度に係わる職人遍歴の旅である。定住の世界と遍歴の世界を対置して語っているから、「ジプシーと放浪・乞食の世界」や遍歴と定住との交わりとしての「牧人・遊牧」まで採り上げていて興味深い。ここではドイツの遍歴職人の旅についてのみ見てみよう。阿部によると、職人の遍歴を定めた最初の規定は1375年のハンブルグの皮鞣組合に見られるが、ここではまだ遍歴は強制ではなく、職人の自由に任されていた。ついで、1389年のリュウベックの靴屋の組合が、親方昇任作品を完成する前に一年間遍歴することを決めているが、必須の条件とまではなっていない。つまり、14世紀にはすでに職人の遍歴が行なわれていたことはわかるが、遍歴が職人の義務とされるのは15世紀半ば以降で、16世紀に全ドイツにひろまり、1731年にドイツ全域について法文化されるという経過を辿っている。

かくてドイツでは、14、15世紀から19世紀に営業の自由が認められるまで、ギルド制度のもとで、初期には北はスウェーデン、デンマーク、オランダ、東はボヘミア、ハンガリー、バルト海地方からロシア、そして17世紀になるとイングランド、フランス、スペイン、イタリア方面へも遍歴し、国境を越えて遍歴の旅を続けたのであった。

南ドイツのコンスタンツ市にはこうした遍歴職人來訪の詳細な記録が残っている。15世紀末から16世紀の半ばにかけて毎年35～100人程度の職人が滞在しており、数字の変動はその時々政治経済情勢を反映しているという。來訪職人の出身地は現在のドイツ、スイス、イタリア、オーストリア、ハンガリーなどの諸都市から来ており、4人以上の來訪者がある出身町の数も160を超えるという。阿部は、この時期ヨーロッパの社会の底辺には無数の職人が言語、習慣、国籍の違いを越えてともに働き、ともに旅する社会が形成されており、職人遍歴という社会現象がもたらした直接的・間接的な影響は巨大であったと言っている。言い換えれば大規模な形で職人の国際交流が行なわれていたわけで、旅というものの一つの効用とみてよいであろう。

遍歴職人自身が旅について書いたものはほとんど残っていないが、中世も末期になると、稀に自分の生活や旅行を記録する職人や芸術家も出てくる。オーラーはそうした例として、もと仕立屋だったヨハネス・ブッバハの『回顧録』と、金細工師で画家のアルブレヒト・デューラー(1471～1528)の『旅行記』を紹介している。全く同世代の二人だが、デューラーのほうはすでに著名な画家として遇され、下にも置かぬ扱いを受けているので、こちらは次節の文人の旅で紹介するとして、ここではブッバハの回顧録の方を見てみよう。

ブッバハは1478年ミルテンベルグで生まれた。父親は幼いブッバハを、2年間の徒弟修業の代金として金貨6グルテンと布20エレを支払って仕立屋の親方に預けた。ブッバハは朝3時、4時から夜は9時、10時まで、時には11時、12時まで重労働をさせられた。家の掃除、火掻き、使い走り、借金の取り立てなどなど…。親方やおかみさん、先輩らの《口

汚い言葉や拳骨》に耐え、寒さや炎暑、飢えに苦しんだ。また、彼がそれ以上に嫌ったのは親方が客をごまかす数々の汚いやり方に加担させられることだった。こんな意地悪や苦痛を忍ぶより、街道の危険のほうがまだましだと思い、マインツに行って修道院付き仕立屋の職にありつく。ここでもこき使われて苦しんだが、修道院長が地方の修道院の視察に行くときや修道士が旅に出るときに供をさせられ、見聞を広めることができた。ブッバハはこのように貧しく恵まれない境遇に育ちながら、最終的にベネディクト修道会に入り、ネーデルランドで勉学に励み、伝記を残したのであった。事実、ブッバハは途中から後述のプラッターと同様遍歴学生として扱われることもあるように、貧しい職人が学問を志し、人文主義者として立てる時代になっていたのである。

ティル・オイレンシュピーゲルの物語 遍歴職人自身が旅について書き残したものはほとんどないが、ドイツでは遍歴職人オイレンシュピーゲルを主人公とする民話的物語が残されている。日本のキツチョムさんとか一休さん、彦一話のような趣のもので、阿部謹也訳「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」を読んでもみると、ドイツ中世の雰囲気伝わってくる。訳者解説によると、全 95 話のうち、手工業を巡る話が 28 話で最も多く、ついで農民に関する話が 20 話、旅籠の主人にまつわる話が 14 話などとなっている。

遍歴職人といっても、オイレンシュピーゲル自身は特定の職を持つ職人というより、話の都合で鍛冶屋になったり、靴屋になったり、ビール造り、仕立屋、毛皮屋、指物師、パン焼き、理髪師など、様々な職種で雇われて働いている。遍歴の旅はドイツ国内がほとんどだが、その足跡はデンマークやオランダ、プラハやローマにまで及んでいる。行く先々で親方連の意地悪に対して仕返しやいたずらを仕掛け、旅籠では主人の態度や待遇が気に入らないと様々ないたずらで腹いせをする。

小話なので（1 話が文庫本で 2～3 ページのものが多い）旅や旅籠の詳しい描写はないが、話の背景である旅の状況が窺える。ブレーメンらしき都市には 14 軒の旅籠があり、金のある紳士の食事は 24 プフェニヒ、次のランクは 18 プフェニヒ、貧乏な職人は召使と一緒に 2 プフェニヒであるとか、司祭や商人と相部屋になった話、旅籠は旅芸人・大道芸人などを嫌なやつだと思っても宿泊を断られない、といった話が出てくる。

同書の最古の出版は 1515 年である。考証によると、オイレンシュピーゲルのモデルらしきウーレンシュピーゲルなる農民がブランシュワイク近くの村に実在し、各地を放浪した末に 1350 年にペストで死んだというが、定かではない。オイレンシュピーゲルを主人公とするいたずら話はすでに 1411 年には存在が確認されているから、これらをもとに遍歴職人や農民、旅籠の主人、司祭などを題材にいたずらを仕かける話を集めたり、創作してまとめたものであろうとされている。阿部は、様々な考証を参考に、同書は職人の世界にも通じている書き手（ヘルマン・ボーテほか）の創作になるものらしいと言っている。いずれにしても、大体 15 世紀の末頃から 16 世紀の初め頃の話である。

なお、中世後期には大学が誕生し、特権階級であった大学生たちの遍歴の旅も中世後期を彩る現象であるが、学生の旅については、近代に向かう新時代の現象の一環として捉え、

第3部で扱うこととする。

旅芸人の世界

最後に、中世後期に現れたヨーロッパの旅芸人について見ておこう。ローマ時代には、あらゆる種類の芝居や見世物が見られ、末期には退廃的な文化現象として世を風靡した。キリスト教はこうした文化に対するアンチテーゼとして登場し、帝国の国教になってからは、初期の教父たちが権力をかざし、言葉と文字によって節度なき恥知らずのローマ文化の退廃を糾弾した。対象は演劇、見世物、およびそれらに結びつくすべての快楽であった。

近代以前の社会では、旅芸人とはどこからともなくやって来る「異邦人」であった。祝祭の機会などに娯楽をもたらす人々として歓迎される一面と、社会のアウトサイダーとして蔑視され、警戒される側面をも持っていたのだが、ヨーロッパ中世にあってはとくに後者の傾向が強かった。キリスト教の支配的道德律は、神への思いと清く正しい生活の在り方を堅持することにあつたから、ローマ帝国末期の猥雑な演劇や大道芸などは、キリスト教文化が浸透していくにつれて芸人ともども社会から消えていった。それが、12世紀に入ると、ローマ時代には都市に定住していた芸人たちが、旅芸人のかたちで戻ってきた。

ヴォルフガング・ハルトゥング「中世の旅芸人」によれば、旅芸人は音楽家であり、詩人であり、役者・ダンサー・曲芸師・大道芸師などなど、観衆を喜ばせるために何でもする、今風にいえばエンタテイナーであった。ひとくちに旅芸人といっても、宮廷に出入りして武勲詩や貴族の恋愛詩を歌う者も、街角や宿屋で歌い踊り、曲芸を見せる者など様々であった。上記書には旅芸人のレパートリーという章があり、旅芸人が行なう芸が列挙され、芸を巧みに行なうためにはそのための技術の習得が欠かせないことが強調されている。彼らが今日のエンタテイナーとちがうのは、中世では旅芸人は旅を常住とする一種の無宿者、故郷を持たない者であり、承認されたどの社会グループにも属さない周縁（マージナル）の人、もしくはアウトサイダーとして扱われていたことである。彼らは宮廷で、旅籠で、街角で歌い踊って人びとを喜ばせ、必要とされ、熱狂的に受け入れられる一方で、社会的には胡散臭い存在、危険なグループとして拒否されるという矛盾をはらむ人たちであった。パフォーマンスの機会を求めて常時旅することは、結果として噂話や見知らぬ土地の知識をもたらすメディアの役も果たしていたのである。

彼らは12世紀以降に登場して以来、中世ヨーロッパの街道を旅しつづけていたのだが、その姿は中世の旅の描写の中で時折見かけることはあっても、旅の実態を証言した例は今のところ見出すことができない。

トルバドゥール 吟遊詩人と訳され、旅芸人の一種とされる。公用語のラテン語からフランス語が俗語として独立していく過程で南フランスに登場した一群の吟遊詩人であり、フランス（語）文学誕生期に南フランスの俗語オイル語によって武勲詩（注）を吟じ、貴族の恋愛詩を歌った。ただし、アンリ・ダヴァンソン「トゥルバドゥール」によれば、トゥルバドゥール（吟遊詩人）とジョングルール（芸人）の関係は、あえて言えば、前者が作

家・作曲家であり、後者は前者が創作したものを演じる演奏者・演技者だという。とはいえ、両者に厳密な境界があるわけではなく、一方が他方の役割を演じることは当然のこととして行なわれていた。

トゥルバドゥールは、中世後期に南フランスに突然登場し、異彩を放って輝き、およそ 200 年の後、異端とされたカタール派などとともに、フランス王によるアルビジョア十字軍によって抹殺されて姿を消す。ジャンヌ・ブーランの「愛と歌の中世：トゥルバドゥールの世界」は、彼らが果たした役割は 11 世紀と 12 世紀の変わり目の時代に、恋愛という新しい概念とともに、男女間の新しい関係を生んだことだと解説する。トゥルバドゥールこそ恋愛を〈発明〉し、その賛歌を作り、かつ初めて歌った人々であるという。ブーランによれば、この時代まで恋愛感情というものは存在しなかった。それ以前には男女の間に交流があったとしても、われわれの時代の相手に対する賞賛と尊敬の気配り、情熱の入り混じった感情をとまなびはなかったと主張し、次のように言う。

女性を蔑視していた古代人にとっては、恋愛は一種の災いであった。彼らはパリスを幻想に囚われた者とみなした。偉大な行動に出られず、ヘレナによって「愚かにされた」男と。ときとして人間や神様を襲うこの災禍を一時的な狂気として描いている。当時の人間は二種類の愛情しか認めていなかった。すなわち、既婚夫人によって例証される夫婦愛、そして娼婦によって具現される売春婦である。一方、蛮族にあつては、女性は獲物あるいは奴隷、いずれにせよ犠牲者である。

続けて彼女は書く。キリスト教が、神の前ではすべての人間が平等であるという教義を確立し、結婚の秘蹟を義務づけ、結婚が有効と認められるには男女の合意が必要であると定めることによって恋愛を復権させた。にもかかわらず、この動きはしばしば無視され、ときには否定されさえしたが、確実に女性の地位を向上させた。そして、他にいくつかの要因が重なって、ある新しい感情を生み出しつつあり、まさにその時に呼応して誕生したのがトゥルバドゥールだったのだと主張する。

「トリスタンとイヅゥ」は成就することのない恋に身を焦がし、騎士たちは理想とする特定の既婚夫人を崇拜し、敬愛し、身も心も捧げ、相手に尽くすのである。このような感情は確かに新しいものであった。トゥルバドゥールは、14 世紀にある意味では巻き添え食って力づくで潰されたのだが、ダヴァンソンは、結局のところ、このような愛は幻想に過ぎず、いつまでも続けられなくて自然消滅したのだとも言っている。しかし、恋愛という新しい個性の発揚はダンテに影響を与え、ペトラルカを感嘆させ、ルネサンスへの胎動にもつながっていったのである。

中世の様々な文献を渉猟すると、トゥルバドゥールを含む旅芸人の挿絵には様々なものがあることを知る。旅芸人は楽器を演奏するにしろ、パントマイムを演じるにしろ、あるいは曲芸や動物扱いなどを見せるにしろ、長年の訓練と技術を必要とする。どれかの特定の社会集団に属しないと社会の構成員と認められない中世世界においても、彼らは次第に

職業として認められる存在になっていくのである。

新しい旅

以上、主として中世後期から一部はルネサンス期にかけてのヨーロッパ大陸内の旅を見てきた。中世後期にはこれら以外に、学生たちの旅、文人たちの旅、マルコ・ポーロをはじめとする中央アジアや中国方面への旅、さらにはポルトガル、スペインによる大西洋航路発見の旅などが行なわれている。これらの旅は中世後期の旅として扱うよりは、中世から近代ヨーロッパへ向う一連の動きの中での旅として、第3部「中世から近代へ」で扱うこととし、以下中世の内陸部の旅行関連の施設とサービスの状況について概観する。

6) 旅の施設とサービス

中世はローマ帝国時代に高度に発達していた「旅と旅のインフラ」を失って、旅そのものが大きく逆戻りした時代であった。それでも、既述の通り巡礼を動機とする旅は次第に盛んになり、生活に余裕のある者はもちろん、無理をしてでも出かける一般の信徒たちがたくさんいた。そうした巡礼者は、何を頼りに遠方への旅に出かけたのであろうか。もちろん印刷された情報はなく、あったとしても一般の人が文字を読む時代ではなかったから、ほとんどが口コミ情報を頼りに、できるだけ多くの人々が連れ立って出かけたのであった。

聖地パレスチナに至る長距離国際交通については、中世史の重大事件であった十字軍の展開の中で述べた。また、サンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼道については、サンチャゴ巡礼の道として紹介したので、まず、ローマ帝国滅亡後の西ヨーロッパの交通の一般的な事情を調べてみよう。

中世ヨーロッパの内陸交通

ギリシャ、ローマの古代文明は地中海を陸伝い、島伝いに移動することによって伝播し発展してきた。ローマ帝国は、ヨーロッパ大陸の内深部にまで舗装街道や石橋を建設し、広域経済圏を構築した。ローマ帝国が消滅したあと、民族大移動の戦乱期、統一権力を欠いたヨーロッパは、小さな共同体内の自給自足経済に先祖帰りするしかなかった。自給自足とは効率が悪く無駄の多い生き方で、別の共同体で多量に生産されるものを買えばすむものまで、それぞれが自分で生産するシステムである。原因であり結果でもあるが、物流が途絶え、打ち捨てられたローマ時代の舗装街道のネットワークは原始時代の状態に戻ってしまった。では、その後のヨーロッパ内陸部の交通はどうなったのか。

道路と街道 ローマ帝国が建設した街道は、近隣の町や村をつなぐ道路や町村内の道路などの生活道路とは別の論理と必要性から、ひたすら効率的に遠くをめざす道であった。既存の町や村とは接触を避け、主として支配者の軍事・公務の移動用に造られた道路であったから、支配権力の消滅はその高速街道の利用者がいなくなることを意味し、街道が使われなくなれば、元の町や村をつなぐ生活道路だけが残る。「道の文化史」によると、イギリ

スでもフランスでも、ローマ時代にせつかく整備された街道は崩れるにまかされ、青銅器時代とさして変わらぬ状態に戻ってしまったという。日本の古代の道路も、律令時代に駅伝制が設けられ、総延長 6,300km におよぶ 7 本の国道がつくられたが、戦乱の世になるとローカルの道路交通だけに戻ってしまったのと同じ現象である。

ローマの道はきわめて利用価値の多い資材で造られていた。そのために、農夫は躊躇なくかつての道路そのものから、あるいはその縁から石をはずして、家畜小屋や家の建て増し部分その他の農事用の建物を造り、できた穴は仮に芝やせいぜいローム（土砂）で埋めておく。彼らはその個所がどこかをむろん知っていたから、車で通るときは注意深くそこを避けた。旅行馬車はその穴にはまり込んで車両や心棒を折っても教区民は困らず、むしろ喜んだ。彼らは手伝ってやり、宿を貸して、道の損傷で金儲けをした。（「道の文化史」）

ところで、上の文中に「旅行馬車」が穴にはまり込むという表現がある。原語がどう書かれているか確かめる術をもたないが、シュライバー自身、中世には乗用馬車は存在しなかったと書いているから、この馬車は旅行用の荷物を運ぶ荷馬車か、病弱者や老人などのための馬車、あるいはこの記述が 15 世紀以降の状況を描いているかのいずれかであろう。馬車の文化はローマ帝国の文化であり、ゲルマン民族は馬には乗ったが、乗用馬車は使わなかった。ラスロー・タール著（野中邦子訳）「馬車の歴史」によれば、中世には、騎士階級などの上層階級は馬で移動し、商人や一般人は徒歩で旅行した。馬車はもっぱら荷車として使われ、乗用に使用されるのは老人や病弱者・女子供がやむを得ず使用しただけであり、その形は様々な図版に残されている。中世の道路と馬車は到底長距離旅行に耐え得るものではなかった。あまりの道のひどさに、ひっくり返らないまでもたちまち船酔い状態を起こしたとも書かれている。乗用馬車が記録に登場するのは早くて 15 世紀以降である。

とはいえ、悪路ではあれ、遠距離を移動する人たちもいるのだから、ローマ帝国以前の《琥珀の道》状態に戻ったとしても、統治者、商人、巡礼者、聖職者らはこうした街道を利用するしかなかった。皇帝や国王は領内の街道や河川の所有権を有するものと考えて、関税・通行税などを徴収し護衛権を行使していた。阿部謹也「中世の旅」によれば、1158 年、神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ一世（在位 1152～1190）は、公道と船舶可能な河川とその支流は皇帝の支配下にあると宣言したが、フリードリヒ二世（在位 1212～1250）は街道を維持することができなくなって、1235 年帝国の街道に対する権利を放棄している。よってそれ以後、公道や河川は領域君主の支配下におかれ、かれらが関税や通行税を徴収し、旅人の護衛の役割も担うことになった。以下、上記阿部「中世」の中の『村の道と街道』にある街道の描写を借用する。

さまざまな階層の人々が街道を歩み去った。ときに王侯、貴族の華美な行列がにぎやかに通り過ぎたあとの静寂のなかを巡礼地詣で老若男女がとぼとぼと杖をひき、遠隔地商人の隊列が埃をたてて通りすぎた直後を、遍歴樂師や遍歴学生たちの群れが行

きすぎる。道路の悪さに加えて、山賊、盗賊などが旅人を襲うという状態は何百年もつづき、事実上 18 世紀にいたるまで街道の交通はあまり改善されなかった。そもそも中世では、高名な巡礼地への街道でもなければ、旅する人々の数のごく限られていたのである。ときに放浪の乞食や娼婦の小グループが嬌声をあげて通りすぎ、騎士が駆け抜け、また飛脚が走り去る。15 世紀頃からは褐色の肌と輝くような瞳のジプシーの一団が街道にみられるようになる。

中世の旅人は今日とは比較にならないほどの多くの危険に取り巻かれていた。道路の整備・修理は近隣の共同体に課されていたが、つねに不十分であり、倒木や土砂崩れ、結氷、洪水などに悩まされ、また盗賊に襲われる危険も多かった。道標も不備であったから、分かれ道で右へ行くか左へ行くかで、そのつどその人の運命が左右されもしたのである。また、馬の飼葉を手に入れるのも困難であった。だから、ザクセンシュピーゲル（13 世紀につくられたドイツ最初の法律の書）によると、旅人は道から届く限りの畑の穀物や草を馬に喰わせることができる、としている。しかし、これでは村人との間で問題が起こらないはずはなかった。いずれにしても定住者がやむをえず稀に行なう旅は、まさに決死の覚悟で出発しなければならなかったのであった。p 7

道路と橋 ヨーロッパには交通路として利用できる川が多いが、真に川が交通・輸送に活用されるのは後世のことで、中世前期では川は交通の手段というより、人間と自然との交流、神的世界との交流の重要な舞台であった。阿部は『水の精から帝国の公道へ』という小項目を設けて、ドイツでは川には水の精が住み、様々な伝説や儀式が生まれて近代まで伝えられている様を紹介している。水は古来人間の生活にとって欠かせないもので、集落も都市も川のほとりに作られ、河川を生命の源泉にしていた。他方、河川は人間に恵みを与えるだけではなく、交通を妨げ、兩岸に住む人々を隔て、時に氾濫を起こして村を襲う不可抗力でもあった。ローマ帝国の時代には、駐屯する軍隊が土木工事も行い、帝国の街道の整備にはしっかりした石橋をかけることも含まれていた。とはいえ、橋はかなり大きな街道が川と交差するところにしかかけられなかったし、帝国の防衛線であったライン川やドナウ川には橋をかけず、ましてやその東側にはもちろんローマの橋はなかった。ちなみに、ライン川には中世を通じて橋がかけられず、そのせいで、19 世紀半ばまでバーゼル〜ロッテルダム間のライン川に固定橋はなかったという。

それでも、12、3 世紀には商業が発展して橋の必要性が痛感されるようになり、地域の発展のために橋をかける努力がなされるようにはなった。言い換えれば、地域の側から橋を作ろうとするエネルギーが生まれてきたのである。橋を必要とするような場所は例外なく都市あるいは都市的集落があった。商人が遠隔貿易を営み、そのための橋をかけることは外部世界と結ばれることを意味し、対岸の一角を経済的に掌握する道が開けるからである。阿部は、橋をかける権利は皇帝に属したが、都市の代表から橋の建設許可を申請する事例をいくつか挙げて、橋建設に付された建設趣旨などを紹介している。これによると、実際は経済上の目的に沿ったものとみられるが、建前は何事も霊的な目的に結びつけて納得し

ていた中世のこととて、表面的には宗教目的が掲げられているという。例えば、「…崩れ落ちたり無人になった教会を再建し、運河や橋をつくり、かくして天国への汝の道が開かれる…」というわけである。世俗の諸侯が橋を建設する際にも、目的として《商人と巡礼の便宜のため》とか、《対岸の教会への道を確保するため》といった理由が付されている。

しかし、中世の架橋技術では大河に橋をかけることは難事業であったし、維持することにもこれに劣らぬ大変さがあった。阿部によると、バーゼルの橋は 1268 年、1274 年、1275 年、1302 年、1340 年、1343 年の各年に雪解け水の洪水で壊れている。架橋する場合、木橋のときには小舟から杭を川底に打ち込んだし、石橋ですらまず木杭で四角い基礎をつくってその中に石を埋めて基礎としたという。時には杭ごと流されることもあり、修理には大変な金と労力を要したのであった。

渡し守 そういう次第で、よほど大きな街道が河と交叉するところしか橋は建設されなかったから、通常旅人も住民も渡し舟を利用して対岸に渡っていた。とりわけ大河が縦横に走っているドイツでは、渡し舟に頼る度合いが高かった。阿部謹也「中世を旅する人々」p 26 は、ドイツにおける渡し場と渡し守について詳しく説明している。街道や水路や橋と違って、渡し舟の運用は人間の力によるしかないから、最初から「法的制度」として発展したのだという。つまり、渡し場の設置と運用は修道院や諸侯や都市が国王から権利を授与され、権利を得たものは国王に賃祖を払って運用した。最初、渡し賃は渡し守と客の話し合いによって決められたが、法外な渡し賃を要求されたり、客が値切ったりするので、渡し賃を法で定めるようになった。人・馬・車などの別、川の状況や時間帯による割増運賃の設定などである。川が多いヨーロッパでは渡し場は重要な交通手段である。阿部の説明は事例が豊富で大変興味深い。関心ある方には一読を勧めたい。

ノーラーの「中世の旅」にも「渡し船」、「橋」という項目があり、浅瀬を探してわたる苦労や、渡し舟に人を乗せすぎて転覆して遭難する話など、河川が道路交通の妨げになっている様が描かれている。

水路と船旅 既述のとおり、ヨーロッパには交通路として利用できる川が多いが、河川が輸送や船旅に使われるようになるのは 12、3 世紀以降のことである。ヨーロッパ中世の河川の旅について書いたものは少ないが、オーラーの「中世の旅」が『内陸の船旅』という一項目を設けて詳しく紹介している。今日では取るに足らぬ曲がりくねった川でも、丸木舟やボート、伝馬船やいかだなど様々な船を使って人や物を運んだ。水路による遠距離交通もしだいに使われるようになり、たとえばヨーロッパの中央に位置するスイスを例に中世の水運について次のように説明されている。少し長いが引用する。

北海からライン川、アーレ川、ローヌ川を経て地中海に達する道は、途中の 30 km を除いて船で航行できる。ライン川を遡ってヴァルツフトまで旅し、コブレンツのあたりでアーレ川に折れ、ビーラーを経てノイエンプルグ（ヌーシャテル）湖に達する。その南端はレマン湖から（陸路で）ほぼ 1 日の距離である。ここを通過してローヌ川を

下り、地中海まで航行することができた。上部イタリアへ行きたいなら、アーレ川の上流 20 kmの所でリマット川に折れ、チューリッヒ湖とワーレン湖を通してワーレンシュタットまで行ける。それともアーレ川やロイス川を上り、ルツェルン湖を過ぎ、フィアヴァルトシュッテッテン湖を通ればフリーエレンに至る。それともアーレ川を上り、ベルンを過ぎてトゥーン湖を通れば、ブリエンツ湖に達する。アルプスの彼方の上部イタリアの湖は、アルプス越えの辛苦を癒す保養の区間になる。西部、中部スイスのほとんどの地域は交通的にはライン川とローヌ川という 2 大水路と結びついている。その他の河川はいかだを流せた。日帰りできるかどうかはさておき、人々は船を利用してライン川やローヌ川の三角州から旅をすることができたのである。

といっても、四六時中船に乗りっぱなしというわけではない。狭いゆれる小船ではほとんど動きがとれない。それゆえ、少なくとも陸地で睡眠をとる夜分、とくに足の運動をすることを好んだだろう。P50。

旅の障害：追剥・税金・不法行為

中世の道路は、夏は埃だらけ、冬は泥んこで歩きにくく、時には木の小枝大枝が積み重なって邪魔をしたりして歩行者の足をはばんだ。陥没した個所もあり、車の轍がのめり込めば、木の枝などを束ねて下に敷いて引っ張り上げねばならなかった。道路がこういう状況である上に、人的な障害ともいうべき旅人を悩ます様々な障害があった。

追剥と泥棒 中世の交通はただでさえ難儀が多かったのだが、これに輪をかけたのが泥棒と追剥の頻出であった。堀米庸三編「中世ヨーロッパ」(世界の歴史③)の表現を借りれば、次のような具合であった。

…遠路の旅で追剥や泥棒の被害に遭遇しない人はまずいなかっただろう。たとえ、幸運にも無事に旅を終えた者があったとしても、絶えざる追剥への恐怖と警戒のために、災難にあったと同じほど神経をすり減らしたにちがいない。道路で盗みや略奪をやる者はいろいろいた。経済的に窮乏した貴族や騎士(盗賊騎士といわれる)、戦争がなく給料を支払ってもらえない傭兵たち、罪を犯したり借財したりして領主のもとを逃げ出してきた農民などであった。中公旧 p 369

このあとの文で、堀米は貴族に荷を奪われたヴェネチアの商人二人が、奪った貴族の城で奪われた品々を買い戻させられる例や、橋のたもとで一人旅の旅人と見ると殺害して身ぐるみはぐ盗賊の例などを紹介している。

旅行と税金 旅行自体に莫大な経費と日数がかかる上に、さらに旅行者、とくに商人を苦しめたのが各地の封建諸侯が取り立てる様々な名目の税であった。封建社会では貴族が地方ごとに支配権をもち、国王の力が及んでいなかったから、封建諸侯の領地を通過するごとに税金を取られた。堀米によると、通行人に対するものとして徒歩税、車税、河川税、

橋税、浅瀬税など、旅行の方法と通行の場所に応じて種類が分かれていた。運搬する商品に対しては、牛馬、塩漬けまたは燻製の魚や肉、小麦その他の穀物、野菜、蜂蜜、油、乾燥させた果物、塩、金属、皮革、武器、染料、羊毛、糸、その他数百、つまり苦勞して運搬するに値するもののすべてに課税されていた。さらに積荷が転げ落ちたのを見つかれば、それは貴族の所有物となって没収された。商人の方も場所によってロバを使ったり、荷馬車にしっかり括りつけたりの対応策をとった。荷車が普及するようになったのは12世紀頃からであり、13世紀以降は国王の力が強くなって、イギリスやフランスでは封建貴族による道路課税は次第に減っていった。

ドイツでは、1240年、神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世（在位1212~50）はフランクフルト大市に集る人々に大市特権状を発給した。これによると、「フランクフルトの市場に来る人々の全てを……余と帝国の保護下におく。……誰であろうと、それらの人々の市場への往来を何らかの方法で煩わせたり、妨げたりしてはならない。……それを敢えてなす者は、余の最大の怒りを招くと覚悟せねばならない」（小倉欣一訳「ドイツ中世の自由と平和」）のであった。基幹道路の確保とラント（帝国と領邦）の平和がフランクフルト市の発展の大前提であったが、領邦君主権が強化されつつあった13世紀後半以降のドイツでは、すでに皇帝にそれを期待することが困難な状況になっていた。

不法行為に対する法的保護 関哲行は、中世の旅行者に対する不法行為を巡礼者と商人・手工業の職人に対するものに分けて説明し、こうした不法行為に対して13世紀以降国王などによる法的保護が規定されるようになったと説明している。

12世紀の「聖ヤコブの書」第1巻と13世紀の「カスティーリアのフェロの書」にサンチャゴ・デ・コンポステラへの巡礼に対する不法行為がいろいろと取り上げられている。ヤコブ書のほうは、たとえば役人による流通税の不法徴取、宿屋や居酒屋での窃盗と度量衡の違反・ごまかし、死亡した巡礼者の遺品の着服、宿屋と結託したアウトローによる金品強奪、混ぜ物をした飲食物を提供する居酒屋、粗末なロウソクや皮手袋を売りつける職人、下剤の混じった薬を販売する医者、両替屋の交換率の違反や手数料のごまかし、などである。また、13世紀のフェロ書のほうは、宿屋の例が多く、都市の入り口で巡礼者を待ち受けて親族同様にもてなすと約束しながら、投宿した巡礼を蔑ろにする。数日前に調理した肉や魚料理を食べさせて病気にさせる、などの事例もあった。もっと悪辣な宿屋や居酒屋は巡礼者を酩酊させ、ないしは毒殺して所持品を奪った。また、巡礼者を食べ物にする詐欺師の活動も活発で、ロウソクなどの品を市価の2倍で売りつけるのは序の口で、司祭になりすまして巡礼者の告白を聞き、贖罪と称して金品を巻き上げる、怪我人らしく変装して同情をひいて金銭を強要する、などなど、である。

こうした不正・不法行為を取り締まるため、カスティーリア王アルフォンソ十世（在位1251~82）が13世紀後半にローマ法に基づいて編纂した「七部法典」は、信仰のために移動する巡礼者の財産保護や流通税の免税特権を規定したのであった。ちなみに、この七部法典はこの後のスペインの法律の基礎となった。

宿と食事

旅に欠かせない宿と食事はどうであったか。ローマ帝国時代にあった有料の旅館は中世に消え失せ、ヨーロッパにはイスラムのキャラバン・サライのような宿泊地はなかった。中世前期のヨーロッパでは、どういう身分の旅人であれ、どこでどのように食事をとり、寝泊りしていたかについての具体的な記録がほとんどない。言えることは、寝泊りすることに対して代価を支払うという発想は、泊まる側にも泊める側にもなかったということである。旅行する人がごく稀にしかいなかったから、旅人に依存する職業である宿屋が存在しないのは当然である。中世ヨーロッパに有料の宿が登場する最も早い例が10世紀の終りくらいで、アルプスの南の比較的旅行者が多い地域に、飲み屋兼宿屋の形で現れているという。有償で客を泊める専門の宿屋が普通に存在するようになるのは、さらに下って14世紀以降のこととされている。では、それ以前に旅した人々はどこでどのように寝泊りし、食べていたのだろうか。答えは、異人歓待という古くからの無償の客人厚遇の風習によって旅人たちは受け入れられてきたのであった。そこでまず、職業としての宿屋誕生以前の異人歓待の慣習についてざっとみておこう。

異人歓待と客人厚遇

異人歓待とは、異邦人を迎え入れ、食事を供し、宿泊させ、庇護することである。太古から見られる人間関係のひとつとして、どの古代社会や未開社会でもみられる風習であるという。H.C.パイヤー（岩井隆夫訳）「異人歓待の歴史：中世ヨーロッパにおける客人厚遇、居酒屋そして宿屋」は、異人歓待を大別して①客人厚遇、②キリスト教の愛にもとづく異人歓待、③君主や権力者の無償の宿営、④貨幣経済上の異人歓待業、の4種に分けている。

①の「客人厚遇」というのは、文明史の最初から宿泊業が成立する以前の世界のどこにも見られる普遍的にして原始的な異人歓待で、ゲルマン民族にもそうした風習があったことが確認されている。②はヨーロッパ中世に特有の異人歓待で、キリスト教による愛の無償歓待が、ゲルマン民族の客人厚遇に統合されて固有の制度として成立した。③の君主厚遇もやはり世界のどこでも行なわれていた慣習で、領主や貴族たち権力者が領内や他領を旅するとき、家臣や仲間の領主たちは義務として無償で受け入れることとされていた。最後の、④貨幣経済上の異人歓待というのは、12世紀以降に貨幣経済が発展し、商業交通が盛んになるにつれて、異人歓待が商業化して行く過程で登場する宿屋の初期形態にほかならない。パイヤーによれば、これら様々な異人歓待は、異邦人に対する敵対から単純な形の客人厚遇の形を経て、多種多様な客人厚遇の形態を生み、これらが並存しつつ最後に有償の異人歓待の形をとり、やがて職業としての宿屋へ発展してきたとする。なお、パイヤーは、すでに宿泊業として機能していたローマ時代の宿屋をも有償の異人歓待の範疇に入れているが、これはヨーロッパ史をひとつの時系列でみるためのつじつま合わせのように思われる。

14 世紀以降になると、総体的に旅する人の数が増えて、西欧、中欧、南欧で、旅人は概ね 1 日の旅程かそれ未満の距離に一箇所の割合で宿場が存在することを当てに出来るようになっていた。とはいえ、有料の旅籠が出来たといっても、私人が無償で人々を泊める異人歓待の風習は並行して行なわれ、近代まで見られたという。

原始的異人歓待 旅する人が稀な未開社会や古代社会では、世界のどこでも異人を歓待する風習があり、それらには似かよったパターンがあった。異邦人とは、ある社会集団に属さない人間のことである。敵と見做されて殺されることもあったし、恐ろしい力を持つ存在かもしれぬゆえに手厚くもてなされることもあった。パイヤーによれば、コロンブスがバハマ諸島に到着したときや、キャプテン・クックがニューカレドニアに上陸したときに手厚くもてなされたのは彼らが神と思われたからだというし、日本のアイヌは「異邦人に対して侮って応対してはならない。というのも、何びとを泊めているのかお前たちには分からないのだから」と言い伝えられてきたという。ホメーロス以後のギリシャでも、神は人知れず地上を歩き回り、客人として現れては善人に報いたり、悪人を罰したりするという考え方があった。ゆえに客人は粗末に扱ってはならない存在なのであった。

キリスト教においても、アブラハムが、主が現れたとき地に伏して客になってくれるよう乞うた例（創世記第 18 章 1～8 節）や、「ヘブライ人への手紙」にある「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。そうすることで、ある人たちは天使たちをもてなしました」（第 13 章 2 節）などの例を挙げて、「神としての客人」を説明している。これらにみられる共通点は、そまつに扱うと罰が下るかもしれないゆえに手厚くもてなすよう教えているのだが、それだけではなく、庇護する客人厚遇の思想もあり、庇護した客人の国許へ行けば、自分も同じように庇護を受けることができるという互恵的な期待も含まれていた。

ともあれ、異人歓待によって無償で物やサービスを提供する時代が長く続き、代価を得る宿屋が成立するのは、13、14 世紀になってからに過ぎないということ自体が、旅というものが特殊な消費形態、ないし特殊な活動であることを示しているといつてよいであろう。

ヨーロッパ中世の異人歓待 パイヤーによれば、ヨーロッパの異人歓待は、神の御心にかなう神聖な制度であると考えられていた点が他の異人歓待と違う。北方ゲルマン人の神話にも、神オーディンが人間の家に客人として泊まることもあり、不親切な迎え方をすると不幸がもたらされると信じられてきた。しかし、ゲルマン神話には、神を恐れる気持ちはあっても《愛による》異人歓待制度という積極的な位置づけはみられないから、神の御心にかなう異人歓待という考えは、古代のキリスト教に始まって、それがゲルマン人に伝わったのであろう。

いずれにしろ、旅人の数が増えて有償で旅人を宿泊させる宿屋が誕生する時代まで、旅する人の側に代価を支払って宿泊するという発想はなく、泊める側も宿泊させるのは庇護であり恩恵であって、金銭的代価を求めるという考えはなかった。パイヤーの「異人歓待の歴史」は無償の異人歓待の種々相を詳細に描いている。貴族、商人、宗教、支配者など

による様々な異人歓待を扱っているが、対価という発想がないから、宿主と旅人との関係やもてなしの内容は千差万別である。異人歓待による宿泊は 3 日が限度であること、食事については、ふるまわれることも宿泊だけのこともあり、食材を自前で調達して料理してもらったりもしている。宿主の責任や旅人側の義務も様々であるが、それらは歴史文献の中に断片的に窺えるだけで、実態はよくわかっていない。

ヨーロッパ中世では、キリスト教が浸透するにつれて、愛の異人歓待のいろいろな形態が展開していった。普遍的な異人歓待もあったが、キリスト教による異人歓待が対象としたのは、主として都市の下層階級と周縁階層であった。彼らは上層階級の客人厚遇のことは知らず、望まず、客を引き受けることもできなかったからである。

なお、ヨーロッパ中世に固有の異人歓待の例である修道院のもてなしについては、中世前期の項で紹介したので省略する。

無償の異人歓待から有償の異人歓待へ 12 世紀以降、十字軍の時代になると巡礼への熱狂が起こり、商業交通も活発化して、巡礼や商人向けの異人歓待の形態・在り様とも種々雑多なものが登場するようになる。巡礼者も特別の巡礼宿泊所や教会の宿坊、修道院のようなどころばかりでなく、一般の旅人と同様に個人の家に泊まり、野宿をすることもあった。一番の問題は食糧であった。普通の人の家に無料で泊めてもらえても、食糧は持参するか市場その他で自己調達するという慣行は 13 世紀になっても続いていた。

ヨーロッパといっても広いから、地域によっていろいろだが、パイヤーに出てくる事例では、異人歓待がいち早く商業化されたのはやはりイタリアで、皇帝ハインリヒ 2 世（在位 1004～24）が 1014 年にイタリアから帰還した際の記録がある。これには、イタリアを旅する者は、客人厚遇の習慣があまり見られないため、何にでもお金を払わされたと記述されている。また、ドイツやフランスでは 12 世紀後半に定期市が開催されるようになり、市の開催中は市場広場を囲むようにテントや仮小屋が建てられて、商人たちはここに宿泊した。都市当局は火災に対する安全性や管理コストの負担と市の利益拡大のために、宿泊賃料を掲示するようになったという。こうした宿泊場所では食事は出ないから、自分で食材を持ち込むか宿主に調理してもらうかするが、持ち込んだ肉の最上部分がほとんどなくなっていたとか、預けておいた食料が消えていたなどといった苦情があれこれ書き残されている。異人歓待は、13、14 世紀に変わり目を迎え、その後は支払を受ける異人歓待としての宿屋が他の異人歓待を圧倒していくのである。

居酒屋と宿屋 中世初期から 12 世紀くらいまでは、多様な形態の客人厚遇と普通の家での食事抜きが無償宿泊が広い範囲で見られたが、時間をかけて徐々に対価を求める宿泊によって代わられていく。宿を提供するだけならさして負担はかからないが、当時としては、いつ来るとも知れぬ客人に食事の提供を約束することは簡単には出来ないことであった。そこで登場するのが居酒屋である。パイヤーによれば、メロヴィング朝時代の資料には居酒屋への言及はほぼ皆無だが、カロリング朝のカール大帝とその後継者たちの勅令には、

居酒屋が自明の存在として登場しているという。ただし、その内容は現代のわれわれがイメージする居酒屋というより、ビールやワインの販売を許可された小売業であり、何でも販売する市場の前段階のような存在であつたらしい。

無償の異人歓待ではこのような居酒屋で食糧を調達することが多かったようだが、初期の居酒屋が宿泊までさせたかどうかははっきりしない。13 世紀以降になると、居酒屋が客を有償で泊める慣行が広がり、酒の小売店、飲み屋、客を泊める飲み屋、泊めるのが主の宿屋など、様々な形に展開していったというが、詳細はわかっていない。ただし、有料の宿屋が生まれたといっても、中世末期に至るまで宿泊させて報酬をもらうこと自体が良いこととされず、上流階層の者は有償の宿屋に泊まることを不名誉なことと考えていたという。言い換えれば、宿屋が誕生してからも、私人が無償で人々を泊める異人歓待の風習はずっと後まで見られ、旅人は宿屋に泊まるものという常識が広がるには、まだ長い時間が必要であつた。

客を泊める個人宅と宿屋を分ける決定的な違いは《公共性》の程度にあつた。居酒屋と宿屋の特性とは、両者ともだれでも出入りできる公共性を義務付けられ、亭主は個人の家と違って、客になろうとする者を追い返してはならず、ともに街道と同列の公共性を持たされていた。そのため、居酒屋も宿屋も私人の家と区別するために、ひと目でそれとわかる看板を掲出する義務があつたのである。 p 313

中世末期の旅籠 古くからの私人による異人歓待は、おもに宿泊の提供に限られていて、客は食糧を持参するか、どこかで購入するかしなくてはならなかった。14 世紀以降、宿泊と食事を両方提供する施設が増え、当局によって管理される宿泊業、具体的には客人のもてなしを業とする旅籠が登場する。旅籠は看板と屋号を外につるすことによって、一方で私人の家と区別し、他方で商館と市場から区別されて、機能の面ではっきり分かれていく。

この時期になると、旅籠の亭主は、条例や誓約によって客人とその馬や駄獣をあたたかく迎えることを義務付けられ、客が多すぎて受入れが出来ない場合には、客人を手伝って宿泊・食事の場所を探すことを義務づけられることが多かった。旅籠は性質上、まず都市、交通の要衝、重要な港町などで営業が成り立つようになり、常時客を宿泊させかつ食事を提供する正規の旅籠が誕生する。前述のとおり、14 世紀以降になると 1 日の旅程ごとに一つ以上の宿が存在することを期待出来るようになってはいたが、別の問題として、宿屋に泊まりたいと思っても、行く先にどういう宿屋が存在するのか、あるとしても空きがあるかどうか不確かだし、到着の日や時刻を前広に知らせることは不可能であつた。当局の要請により、職業としての旅籠は一定数以上の客（10 人が多かった）を泊めることができる施設がなければならなかったし、乗用動物のための水、飼料、小屋を備えなければならなかった（巡礼の文化史 p 191）。しかし、実際には、仮に部屋が全部塞がったあとで上位の人が来れば、下位の者を追い出して、より儲けの多い客を受け入れる操作は当然のように行なわれていた。

総じて言えば、中世では、旅する人びとは金を払って泊まる宿屋というものをまだあま

り必要としなかった。「巡礼の文化史」の記述を借りれば、巡礼者は修道院や救貧・施療院などに泊めてもらい、国王たちは支配地以外でも王侯君主の許に泊まり、その他の貴族も仲間や知り合いのところに泊まった。旅する司教は同じ身分の者か主任司祭、大修道院長の許を訪れればよく、緊急の場合以外宿屋に泊まることを禁じられてもいた。都市貴族や商人は、少なくともある程度の規模の商業都市なら、同じ身分の同業者に受け入れられていた。そのほうが宿屋に泊まるよりも名誉なこととされていたからであった。

以上が大雑把な中世ヨーロッパの旅の状況と条件の概観である。とはいえ、ヨーロッパ中世を俯瞰的に捉えることは極めて困難である。それは同じヨーロッパと呼ばれる地域でも、イタリア、スペインという古くからの地中海国家に加えて、新たに登場してきたフランス、ドイツ、イギリスなどの国々はそれぞれ異なる歴史と国民性をもち、発展のスピードも形態も異なっていて、ひとつには扱えないからである。ただ、それぞれの国の個性がはっきり形を取り始めるのはもう少し後のことと考えておくことにしよう。

旅籠についての対話 居酒屋や旅籠は村の生活の中心である一方、旅人の世話をすることによって外の世界の情報をいち早く知ることが出来た。阿部によれば、中世の居酒屋や旅籠の主人は、支配者と村人との間で板ばさみ状態にもなったという。時に領主の手先になるかと思えば、村落共同体構成員である村人たちが祝い、飲み、遊ぶ場所でもあり、村人たちの不満に耳をかたむける存在でもあった。

旅籠について主人や村人が書き残したものはないが、旅人、とくに外国人の利用者が書き残した記録がわずかだがある。そうした記録の中で最も古く有名なのがエラスムス（1469?～1536）の「対話集」に収録されている『旅籠についての対話』である。「対話集」の邦訳は抄訳で問題の『旅籠についての対話』は含まれていないので、阿部謹也の「中世の旅」から概要を紹介すると以下のような具合である。

イギリスかロンバルディアかスペインあたりの出身者とみられる男（甲）が、リヨンの宿の素晴らしさ、とくに婦人による歓待がオデッセウスのサイレンのように旅人の心をひきとめて離さないありさまを語ったあと、ドイツ旅行の経験のある男（乙）からドイツの宿について話を聞くという筋書きである。

案内を乞うても誰も出て来ず、しつこく呼び続けるとようやく小さな窓から男が首を出すところから始まる。少々長いが、ヨーロッパ中世の旅籠の状況をこんなに詳しく読める記述はほかにないので、雰囲気分かる程度に再掲させて頂く。

乙 この男に泊めてもらえるかどうか尋ねなければならない。拒絶されなければ君の頼みが聞き届けられたということだ。厩はどこかね、と聞くと手で教えてくれる。それで勝手に馬の世話をすればよいわけさ。下男はまったく手を動かさない。もしそれが有名な宿だと、下男が厩に案内してひどい場所しか割りふってくれない。よい場所は後から到着する客、とくに貴族のためにとっておくというわけさ。ちょっとでも文句を言おうものなら、すぐに「気に入らなければほかの宿を探しな」

とくる。…馬の手当てがすむと脛当てと荷物、そして埃といっしょに客間に行く。
埃ばかりは皆に共通のものだからね。

甲 フランスでは着物を脱いで乾かしたり、くつろげる部屋があてがわれるがね。

乙 ここではそれどころではないよ。客間で長靴を脱ぎ、室内履きをはき、必要なら肌着を着替え、雨に濡れた衣服を暖炉のそばにかけて自分で乾かすのだ。手を洗う水は用意してあるが、たいていはきれいすぎて、そのあとでこの洗いをすすぎおとすために別の水をもらわなければならないほどだ。

甲 贅沢のために脆弱にされていないという人びとはたいしたものだと思うよ。

乙 午後四時に到着しても、九時前、ときには十時前には夕食にありつけないんだ。

甲 それはまたどういうわけだね。

乙 客が皆揃わなければ何も用意しないのさ。一度の労力で皆の分を済ませてしまう魂胆なのだ。ときには同じ客間に八、九十人もの新しい客が来ることもある。兵隊や騎兵、商人、船乗り、馭者、農民、見習い職人、女たちや健康な者も病人も来る。

甲 それじゃまるで木賃宿だね。

乙 てっとりばやくいえば、まるで昔のバベルの塔のように言葉と人間のごちゃ混ぜさ。外国人が現れて、その素振りから身分の高さがうかがわれようものなら、皆の目はそちらに釘付けになって、まるでアフリカから運ばれてきたばかりの動物でも見るようにまじまじとみつめる。食卓に座っても振り向いて目をはなさず眺め続け、食事もそっちのけだよ。

甲 ローマやパリ、ヴェネチアでは誰も珍しがらないがね。

といった調子で続き、ようやく食事が出され、その様子が詳しく述べられる。出されるものは薄いワインから始まって、肉入りスープとパン、別のスープ、煮た肉か塩漬け魚を温めたもの、続いて粥、いくぶん固めの料理、それからひもじさがたっぷりいやされる炙り肉または煮魚が運ばれてくる。充分食べると、気に入ったかどうか尋ねられ、やや上等なワインが出てきて大騒ぎしながら飲む。最後にチーズが出て、召使がお盆を持って出けると皆がお金をその上に置く。沢山飲んだ者も飲まなかったものも払うお金は同じである。

最後に甲が待遇はどこでも同じかどうか尋ね、乙が「僕が話したよりも親切なところも乱暴なところもあるが、おしなべていえばこんなものさ」といって終る。

世界の名著「対話集」の渡辺一夫の解説によると、「対話集」というのは、エラスムスがパリに滞在していた 1496 年から 1501 年に、生活の資を得るためにラテン語の個人教授用に卑近な日常生活の文例集として作ったものだという。エラスムスの弟子のひとりから講義ノートを譲り受けた人が、エラスムスに無断で印刷出版してしまったものが初版であるという。阿部によれば、「対話集」の初版が出たのは 1490 年年代末であるが、「旅籠に関する対話」は 1523 年の版に初めて登場したという。

